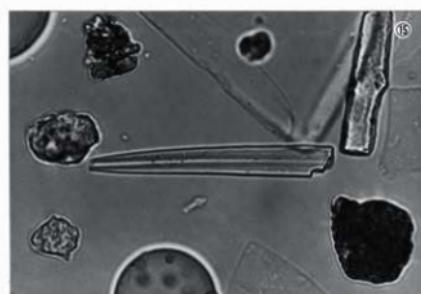
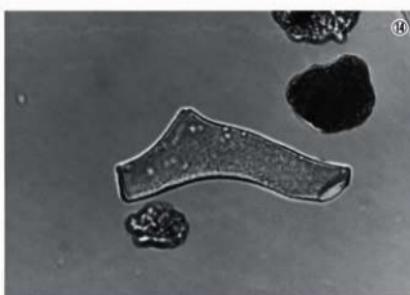
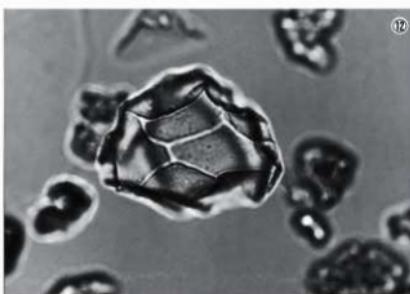
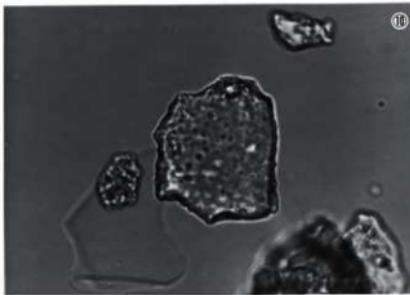
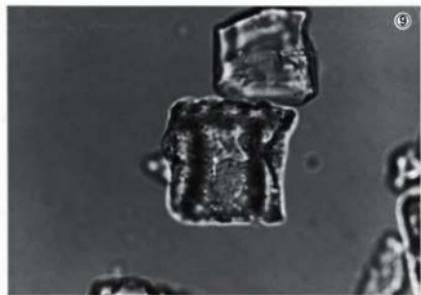


植物珪藻体写真 1



0 50 100 μ m

- | | |
|-----------|----------------|
| ①・② イネ | ⑪ マダケ属型 |
| ③ オオムギ族 | ⑫ ブナ科(シイ属) |
| ④ ヨシ属 | ⑬ クスノキ科 |
| ⑤・⑥ ススキ属型 | ⑭ マンサク科(イスノキ属) |
| ⑦ ウシクサ族型 | ⑮ 海綿骨針 |
| ⑧ メダカ節型 | |
| ⑨ ネザサ節型 | |
| ⑩ クマザサ属型 | |

植物珪酸体写真 2

第7節 花粉分析

株式会社 古環境研究所

1 試料

分析試料は、Y-13グリッド断面（中世歎問状遺構④）の溝部（試料4）と歎部（試料5）の2点である。

2 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学的処理を施して行った。
1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2) 水洗した後、0.5mmの篩で種などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

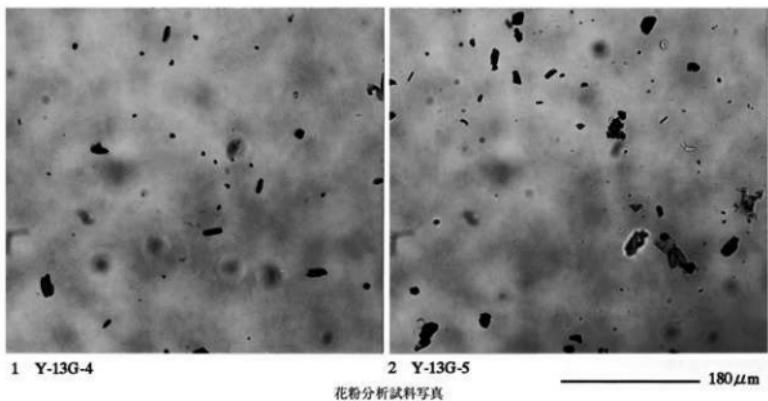
検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によつて300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有的現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。

3 結果と考察

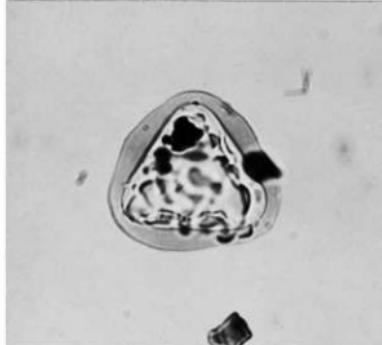
分析の結果、中世歎問状遺構④の溝部（試料4）からシダ植物胞子1形態がごく少量検出されたが、花粉はいずれの試料からも検出されなかった。このように花粉が検出されない原因として、乾燥的な土壤生成作用や風化作用によって花粉が分解されたことなどが考えられる。

参考文献

- 中村純（1973）花粉分析。古今書院、p.82-110。
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料・研究の方法。角川書店、p.248-262。
鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集、60p。
中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。



花粉分析試料写真



植物珪酸体写真

第8節 古代畝間状造構②に関する自然科学調査 パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

K-7区で検出された古代畝間状造構②に関して、年代に関する情報を放射性炭素年代測定、作物に関する情報を花粉分析と植物珪酸体分析により得る。また、便所遺構の堆積物では寄生虫卵の密度から糞便の堆積を検出することができる(黒崎ほか1994)ことから、畝溝への施肥(人糞の利用)の可能性を寄生虫卵分析により検討する。

1 試料

調査対象は、K-7区西壁で見られた堆積物である。この堆積物は主に砂で構成され、下位より年代不詳の畝溝を構成するシルト混じり砂、洪水砂、鎌倉時代遺物包含層のシルト混じり砂へ砂、旧水田耕土のシルト混じり砂の4つに区分される。

畝溝は、発掘調査所見から平安時代の可能性も指摘されており、東西方向に並行して構築されている。なお、他区内には弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代の各遺物包含層から認められている。

試料は、壁面から堆積物5点が採取された(第191図)。

この中から、畝溝堆積物(試料5)を中心に試料を選択し、放射性炭素年代測定1点(試料5)、花粉・寄生虫卵分析2点(試料2・5)、植物珪酸体分析4点(試料1・2・3・5)を選択した。

2 分析方法

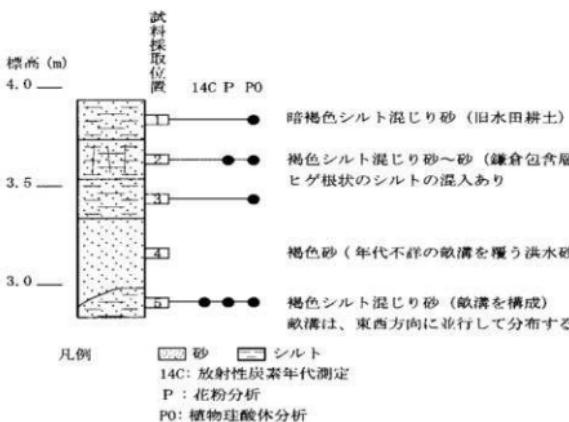
(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

試料約10gに対して、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレバートを作製し、光学顕微鏡下でプレバート全面を走査する。出現する花粉・孢子化石の全ての種類について同定・計数する。

なお、寄生虫卵に関しては金原・金原(1994)等の分析方法を参考に、試料を正確に秤量して花粉分析と同様な物理・化学的処理を施す。処理後の残渣を定容して一定量を抽出し、グリセリンで封入して、1gあたりの各種類の個数を正確に求める。



第191図 K-7区西壁の分析層位

(3) 植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ボリタンゲスティト、比重2.4)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュラックスで封入しプレバートを作製する。400倍の光学顕微鏡下全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部細胞由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表69に示す。

表69 K-7区西壁の放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の状態	年代値 (y.B.P.)	$\Delta^{14}\text{C}$ 補正	Coad-No.
K-7区西壁 畝溝	土壌	1,640±60	-185.4±6.0	Gak-20360

年代値: 1,950年を基点とした値。

(2) 花粉化石・寄生虫卵の産状

試料2では保存状態の悪いシダ類胞子2個体のみが認められ、花粉化石は検出されない。また、試料5は無化石である。一方、寄生虫卵は2試料とも検出されない。

4 考察

(1) 煙の年代について

K-7区北壁の畝溝から得られた放射性炭素年代値は、紀元4世紀頃の年代を示した。発掘調査所見からは平安時代頃の可能性が指摘されており、今回の測定結果とは年代観に差が見られる。

この点は、測定した土壤中の有機物(土壤腐植)に起因すると考えられ、畝溝を構成する土壤の形成過程を明らかにし、測定値を評価する必要がある。

(2) 煙の作物について

畝溝では、栽培植物としてイネ属の植物珪酸体が認められたものの、わずかであった。イネ属は、陸稻が烟作されるとともに、煙の保溫・保濕材として敷き藁されることもある。今回検出されたイネ属が畑作物か、敷き藁に由来するものか、今回の結果からは明確にならない。

が、いずれにしろ畝溝での烟作に関連する可能性が考えられる。しかし、キビ類やムギ類などの植物珪酸体は検出されず、これらのイネ科烟作物が栽培されていた可能性は低い。

なお、ソバなどに由来する花粉化石は全く検出されなかったが、花粉・孢子化石は有機膜で構成されているため、空気中の酸素により酸化・分解されやすい。また、畝溝で烟作が行われた場合、烟耕土は常に空気に曝されていたことが想像される。わずかに検出されたシダ類胞子の保存状態が悪かったことを考慮すれば、花粉・孢子化石が畝溝へ混入・堆積した後に酸素に曝される好気的状態があつたことなどの要因で分

解・消失したと考えられる。そのため、他の畑作物が栽培されていた可能性もある。

また、この時期の植生について、今回の結果から詳細を検討することは困難である。しかし、少なくとも検出された植物珪酸体の産状から、タケア科をはじめとして、ウシクサ族、イチゴツナギア科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。

上位層では、鎌倉時代遺物包含層でもイネ属が認められ、その出現率も高くなる。そのため、本層が堆積した頃には、本地点でも稲作が行われるようになったことがうかがえる。さらに、旧水田耕土でもイネ属が検出され、現地所蔵を裏付けける結果と言える。また、周囲にはタケア科などのイネ科植物が生育していたと思われる。

(3) 施肥の可能性について

歴譜からは、寄生虫卵が全く検出されなかった。寄生虫卵は、花粉・胞子化石と同様に有機膜で構成されているため、空気中の酸素に曝される好気的状態では分解・消失する可能性がある。そのため、今回の産状から施肥などで糞便が利用されていたかを判断することは困難である。

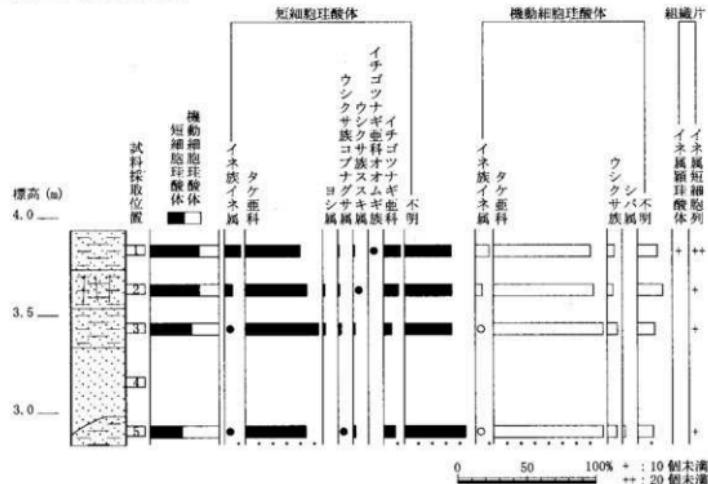
なお、施肥が行われた場合にはリン酸などの成分含量が高くなることも想定され、土壤理化分析を実施することで間接的に検討できると思われる。そのため今後、同時期の耕作地を対象とした調査例を増やし、糞便利用について検討していきたい。

引用文献

- 金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化。
可視化情報、14 (53), p.79-84.
近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性
と応用。第四紀研究、25, P.31-64.
黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子（1994）トイ
レの考古学。日本考古学学会第60回総会研究発表要旨
集, p.49-51。日本考古学学会。

表70 K-7区西壁の植物珪酸体分析結果

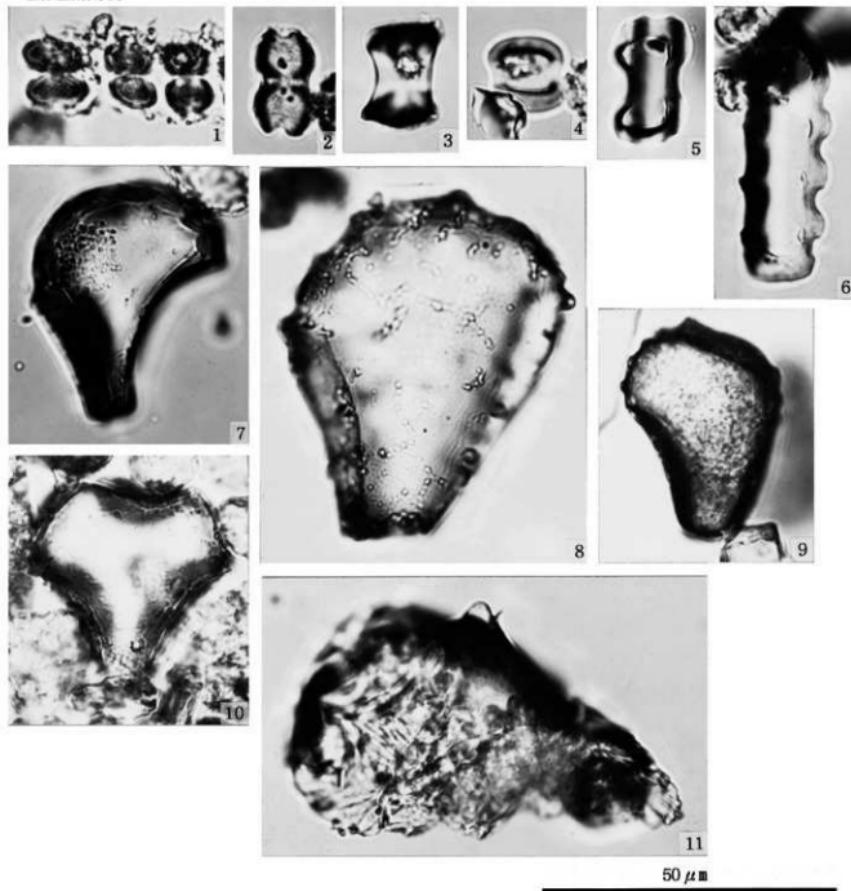
種類	試料番号	1	2	3	5
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	42	18	2	1	
タケア科	140	136	109	93	
ヨシ属	-	5	4	-	
ウシクサ族コブナグサ属	4	4	5	2	
ウシクサ族ススキ属	4	3	3	4	
イチゴツナギア科オムギ属	1	-	-	-	
イチゴツナギア科	43	33	12	18	
不明コビヒ型	76	57	31	37	
不明ヒゲンヒ型	9	9	4	3	
不明ダンチク型	34	39	35	54	
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	14	6	1	1	
タケア科	97	87	108	196	
ウシクサ族	7	5	10	17	
シバ属	-	-	-	5	
不明	20	22	17	28	
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	353	304	205	212	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	138	120	136	247	
計	491	424	341	459	
組織片					
イネ属短細胞	2	-	-	-	
イネ属短細胞列	12	3	1	1	



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の種類を示す。また、組織片の率状を検出個数により+の記号で示す。

第192図 植物珪酸体群集と組織片の産状

植物珪酸体写真



1. イネ属短細胞列 (試料番号1)
 2. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号1)
 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号3)
 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号2)
 5. コブナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号1)
 6. オオムギ族短細胞珪酸体 (試料番号1)
 7. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号3)
 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号3)
 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号3)
 10. シバ属機動細胞珪酸体 (試料番号4)
 11. イネ属穎珪酸体 (試料番号1)

第9節 中世歴史遺構②に関する自然科学調査

パリメ・サーヴェイ株式会社

はじめに

持松跡遺跡は、万之瀬川添いの低地に立地する。平安時代（12世紀後半）の中国製陶器類がまとまって出土し、中世以前と考えられる痕跡も検出されている。

今回の分析調査では、G-4区で検出された痕跡の年代に関する情報を放射性炭素年代測定、作物に関する情報を花粉分析と植物珪酸体分析により得る。また、今回は施肥（人糞の利用）の可能性を検討するため、痕跡の堆積物について寄生虫卵分析を試みる。これは、便所構の堆積物では、寄生虫卵の密度から糞便の堆積を検出することができる（黒崎ほか、1994）ためである。

なお、本遺跡K-7区でも中世以前の歴史が検出されており、栽培植物や施肥に関する情報を得る目的で同様な自然科学調査を実施した。その調査結果とも比較検討を行う。

1 試料

調査対象は、G-4区北壁で見られた堆積物である。この堆積物は主に砂で構成され、大きく7つに区分される。

このうち、最下位には古墳時代遺物包含層のV層、上位に時期不明の痕跡が検出されたIV層、これを覆う洪積層が見られる。IV層は、発掘調査所見からK-7区の歴史よりも上位とされる。また、砂とシルトの互層、さらに上位に比較的厚い灰褐色砂層を経て、中世遺物包含層（Ⅲb層）、褐灰色シルト混じり砂（床土？）、Ⅲa層とされる暗褐色シルト混じり砂が堆積する。

試料は、北壁断面で堆積物11点を採取した（第193図）。この中から、痕跡を中心に試料を選択し、放射性炭素年代測定1点（試料番号10）、花粉・寄生虫卵分析と植物珪酸体分析2点（試料番号10・11）を実施する。

2 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用している。

（2）花粉分析・寄生虫卵分析

試料約10gに対して、水酸化カリウムによる泥化、分別、重液（臭化鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査する。この間に出現する花粉・胞子化石の全ての種類について、同定・計数する。

なお、寄生虫卵分析では、金原・金原（1994）等の分析方法を参考に、試料を正確に秤量して花粉分析と同様な物理・化学的処理を施し、処理後の残渣を定容して一定量を抽出し、グリセリンで封入して、1gあたりの各種類の個数を正確に求める。

結果は、出現個体数の一覧表として表示する。また、花粉化石が100個以上検出された試料については百分

率で出現率を算出し、花粉化石群集組成図を作成する。出現率の算出は、總花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基準として用いた。図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（3）植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250kHz、1分間）、沈降法、重液分離法（ボリタンクスティト、比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュエラックスで封入しプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

3 結果

（1）G-4区北壁の放射性炭素年代値

結果を表71に示す。

表71 G-4区北壁の放射性炭素年代値

試料名	試料の質	年代値	誤差（±）	$\delta^{13}\text{C}$	測定番号
10（痕跡）	土壤	290	70	-20.4	Gak-20373

注（1）年代値：1,950年を基点とした値。同位体補正がされている

（2）誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代

（3） $\delta^{13}\text{C}$ ：試料元素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

（2）G-4区北壁の花粉化石・寄生虫卵の産状

調査した2点のうち、試料番号11ではシダ類胞子1個、試料番号10ではシダ類胞子25個が検出されるが、花粉化石は全く認められない。

また、寄生虫卵は2試料とも検出されない。

（3）G-4区北壁の植物珪酸体の産状

結果を表72、第194図に示す。

各試料から植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号11・10では、イネ属やキビ属、ムギ属などのイネ科作物由来する植物珪酸体が検出されない。

検出される種類はタケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴナギア科などであり、その中ではタケア科の産出が顕著である。

4 考察

（1）烟の年代について

G-4区北壁の痕跡から得られた放射性炭素年代値は、17世紀頃に相当する。この年代値は、K-7区西壁で検出された中世以前の歴史より層位的に上位にあることは矛盾しないが、本地点の中世遺物包含層との間に層位的な逆転を生じる。

この点は、測定した炭素が土壤中の有機物（土壤腐植）であることに起因すると考えられる。すなわち、生成年

表72 G=4区北壁の植物硅酸体分析結果



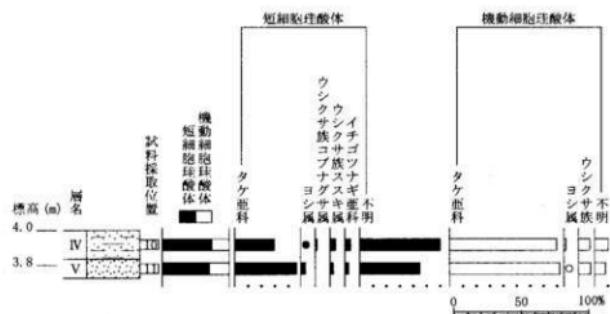
凡例 砂 酸化鐵
シルト

14C: 放射性碳素年代测定

P; 花粉分析

PO: 植物球蛋白体分析

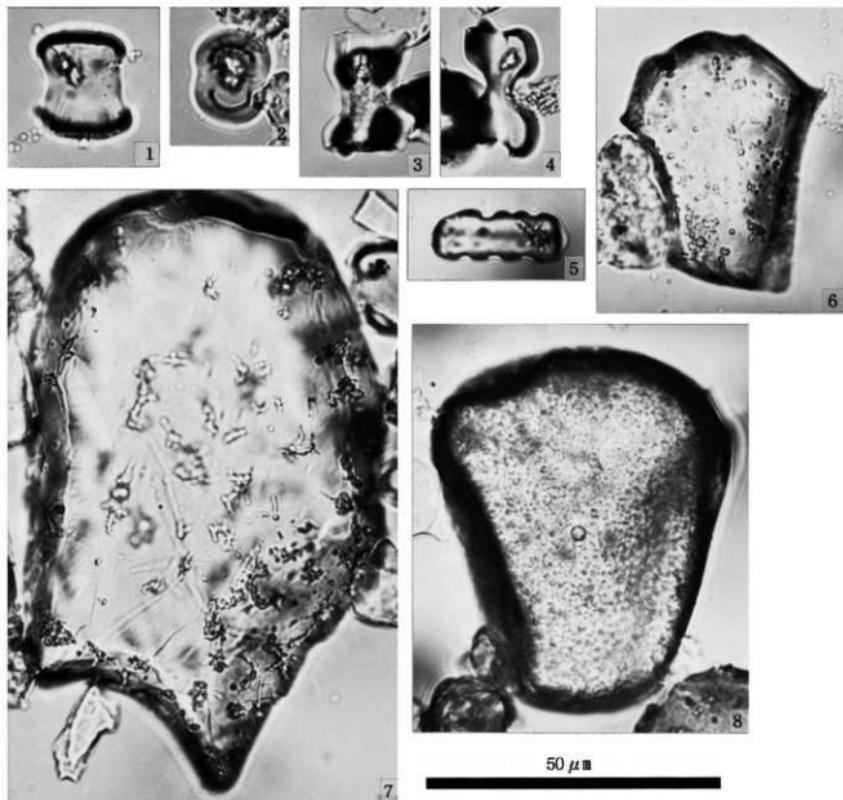
第193図 G-4区北壁の分析層位



出現率は、イネ科葉部短細胞抗体、イネ科葉身機動細胞抗体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

第194図 植物珪酸体群集の層位分布

植物珪酸体写真



1. タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号11）

3. コブナグサ属短細胞珪酸体（試料番号10）

5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号10）

7. ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号10）

2. ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号11）

4. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号10）

6. タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号10）

8. ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号10）

代の若い上位層の有機物が、本地点のような粗い碎屑物で構成される堆積物中で下位に浸透・移動し、烟跡の堆積物中に上位の有機物が混入したためと思われる。

したがって、今回の烟跡の年代に関しては、今後の類例蓄積をもって再検討する必要がある。

(2) 煙の作物について

古墳時代遺物包含層と上位の烟跡からは、栽培植物に由来する花粉化石や植物珪酸体が全く検出されなかつた。花粉・胞子化石は有膜體で構成されているため、空気中の酸素により酸化・分解されやすいので、烟耕土は常に空気に曝されていたことが想像される。わずかに検出されたシダ類胞子の保存状態が悪かったことを考慮すれば、花粉・胞子化石が酸素に曝される好気的状態があつたことなどの要因で分解・消失したと考えられる。そのため、今回の産状から、栽培されていた煙作物の種類を推定できない。

また、本地区ではイネ科作物に由来すると見られる植物珪酸体に乏しく、その栽培は考えにくい。しかし、本地区的烟跡以前に構築されていたとされるK-7区の歴史では、イネ属の植物珪酸体が検出されており、稻作が行われた可能性があったが、本地区では判然としない。

なお、今回得られた分析結果からこの時期の植生について詳細を検討することは困難であったが、わずかながら検出された植物珪酸体の産状から、タケアキ科をはじめとして、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。

(3) 施肥の可能性について

烟跡試料からは、寄生虫卵が全く検出されなかつた。寄生虫卵は、花粉・胞子化石と同様に有膜體で構成されているため、空気中の酸素に曝される好気的状態では分解・消失する可能性が高い。なお、今回の産状から施肥などで糞便が利用されていたか判断することは困難である。

なお、煙などで施肥が行われた場合には、リン酸などの成分含量が高くなることが想定されるので、今後土壤化学分析を実施することで間接的に検討できると思われる。今後、同時期の耕作地を対象とした調査例を増やし、検討をしていきたい。

引用文献

- 金原正明・金原正子(1994) 堆積物中の情報の可視化。可視化情報、14(53), p.79-84.
近藤錬三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25, p.31-64
黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子(1994) トヨレの考古学。日本考古学協会第60回総会研究発表要旨集、p.49-51。日本考古学協会。

第10節 1号土坑墓に関する自然科学調査

パリノ・サーウェイ株式会社

はじめに

持株松遺跡は万之瀬川添いの低地に立地する。発掘調査の結果、平安時代(12世紀後半)の中国製陶器類がまとめて出土しており、このうち、0-9地区では1

号土坑墓から白磁の端反碗と青白磁の合子が出土した。今回は1号土坑墓に関して、年代観に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定、内容物に関する情報を得ることを目的としてリン分析と脂肪酸分析を実施する。

1. 年代推定

1-1. 試料

調査対象は、1号土坑墓埋土1点である。

1-2. 分析方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

1-3. 結果

結果を表73に示す。

表73 1号土坑墓試料の放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	年代値	誤差(±)	$\delta^{13}\text{C}$	測定番号
1号土坑埋土	土壤	1,790	60	-22.4	GaK-20361

注。(1) 年代値: 1,950年を基点とした値。同位体補正がされている。

(2) 誤差: 標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代。

(3) $\delta^{13}\text{C}$: 試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に産出した値。

1-4. 考察

土坑埋土の放射性炭素年代測定値は、同位体補正値で1790±60年前を示した。本土坑の時代観については、覆土上部から出土した白磁碗が12世紀後半~13世紀前半のものであったこと、本土坑が構築されている堆積層が奈良・平安時代の遺物を包含していることから、中世頃のものと考えられている。今回の年代値はその時代観よりかなり古い値となっている。この原因としては、1) 土坑を堆積物が別の場所から持ち込まれたもので、その土壤の堆積年代が古かった。2) 本土坑が構築されている堆積物が長い間地面となっており(古墳時代の頃よりも堆積していない)、古い時代の炭素が含まれていた、などの可能性が考えられる。今後、調査地点の地形や堆積層序に関する検討を行い、発掘調査成果と併せて、今回の年代値について再評価したいと考える。

2. 内容物の検討

2-1. 試料

試料は土坑墓埋土、および対照試料とされた基本土層Ⅲ b 層とⅢ c 層から採取された合計3点である。

2-2. 分析方法

(1) リン分析

測定は、土壤養分測定法委員会(1981)を参考に、硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法を行った(土壤養分測定法委員会、1981)。以下に、各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させ、風乾紳士試料とする。風乾紳士試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾紳士試料2.00gをケルゲル分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5

mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P205)濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P205mg/g)を求める。

(2) 脂肪酸分析

脂肪酸分析定法(坂井ほか、1996)に基づき、脂肪酸を抽出した後、クロマトグラフィーで測定し、測定データを解析する。

2-3. 結果

(1) リン分析

結果を表74に示す。

土坑墓埋土および対照試料は、いずれも黒褐色を呈する粘土質である。

リン酸含量は、対照試料と比較して土坑墓埋土が僅かに高い。

表74 リン分析結果

試料	土性	土色	P205 (mg/g)
土坑	埋土	Lic	10YR3/2 黒褐 1.71
サンプルA	O-9区Ⅲb層	Lic	10YR3/2 黑褐 1.49
	O-9区Ⅲc層	Lic	10YR3/2 黑褐 1.29

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性。

Lic：輕埴土(粘土25%~45%，シルト0%~45%，砂10%~55%)

(2) 脂肪酸分析

結果を第195図に示す。埋土の脂肪酸組成は、対照試料とはほぼ同様である。哺乳類の脳・神経・臓器に多く分布する(中野、1993)と言われる高級脂肪酸であるC24:0(リグノセリン酸)がわずかに検出されるが、C20:0(アラキジン酸)やC22:0(ベヘン酸)は全く検出されない。

また、ステロールは埋土からはほとんど検出されない。これに対して、対象試料のⅢb層からは動物性的ステロールであるコレステロールが確認されており、埋土とは異なる。Ⅲc層は埋土と同様にはほとんど検出されない。

2-4. 考察

1号土坑墓埋土および対象試料は、いずれも土色が黒褐色を呈し、土壤腐植に富むことがうかがえる。また、土壤中の理化学成分を保持しやすい粘土にも富むことから、遺構内にリン成分が供給された場合には残留しやすいたと推定される。

現在の土壤に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量はBowen(1983)、Bolt・Bruggenwert(1980)、川崎ほか(1991)、天野ほか(1991)から、約3.0P205mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P205mg/gとの報告もある川崎ほか(1991)。遺跡の調査例では、骨片などの痕跡が認められる土壤で6.0P205mg/gを越える場合が多い。したがって、

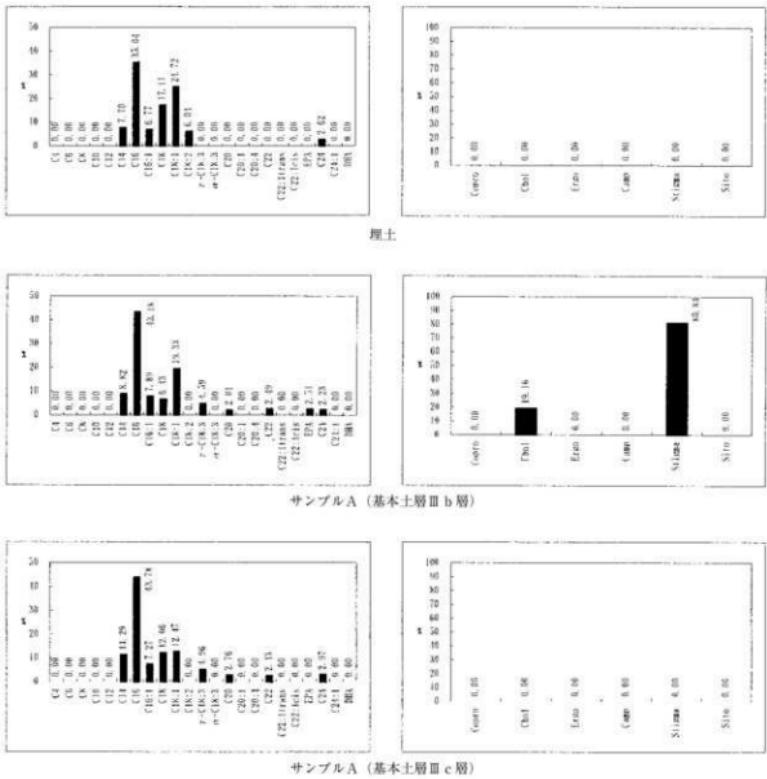
過去の堆積物において、これらの値を著しく越える値を示す場合は、その堆積物中には外的要因(おそらく人為的影響によるもの)によるリン酸成分の富化が指摘できる。

今回の1号土坑墓埋土のリン酸含量は、この天然賦存量の範囲内にある。また、対照試料と比較して若干高い値となっているが、有意差であるとは考えにくい。したがって土坑内に外的要因、特にヒトを含む動物遺体の埋納によるリン酸の富化は認められないと判断される。一方、埋土の脂肪酸・ステロール組成には特異な成分の濃集は見られず、動物遺体の痕跡は認められない。

以上から、本結果を見る限り、土坑内に遺体の痕跡が残留しているとは考えにくく、土坑の用途が墓であるとは概にいえない。今後さらに、同様な調査により資料を蓄積し、検討していくことが望まれる。

<引用文献>

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信(1991)中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 土壤無機化学—元素の循環と生化学一、浅見輝男・茅野充男訳、297p.
- 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学。岩田進午・三輪容太郎・井上隆弘・陽捷行訳。学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOLD CHEMISTRY] p.235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986) 土壤標準分析・測定法、354p. 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編(1981) 土壤養分分析法、440p. 養賢堂.
- 川崎弘・吉田 捷・井上恒久(1991)九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書第1卷、411p. 産業図書.
- 中野益男(1993)脂肪酸分析法。「第四紀試料研究法2 研究対象別分析法」、p.388-403. 東京大学出版会.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」、p.39-40.
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄(1996)灯明皿の脂質分析。富山県文化振興財團埋蔵文化財調査報告第7集「梅原胡麻道遺跡発掘調査報告書(遺物編)第二分冊」、p.24-37. 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所.



第195図 脂肪酸分析結果

第11節 赤色顔料の分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

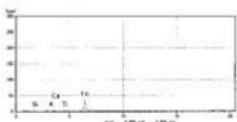
持株松遺跡出土資料に付着した赤色顔料について、蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000）を用いて定性分析を行い、走査型電子顕微鏡（日本電子製 JSM-5300LV）を用いて、顔料の粒子形状観察と画像撮影を行った。古代赤色土器174・183共に胎土部分を2カ所、内面の赤色部分を2カ所測定した。

174については、胎土部分と赤色部分とを比較すると、赤色部分の方に鉄の強いピークが表れた。この他に、銅が0.2~0.3%赤色部分に認められた。

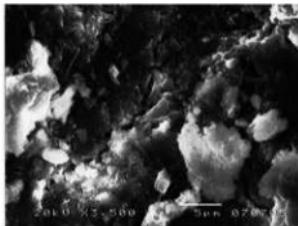
183については、胎土部分と赤色部分とに鉄分が多く認められているが、両者について明確な差が認められなかつた。このことが、何に由来するのかは不明である。

No.174

①胎土部分1

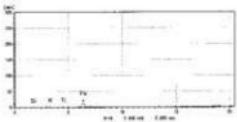


③内面赤色部分1

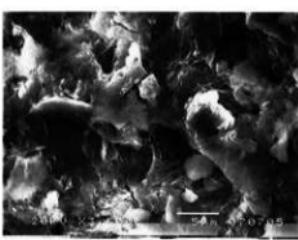
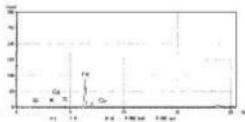


③の写真

②胎土部分2



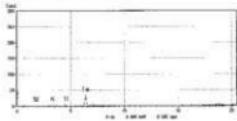
④内面赤色部分2



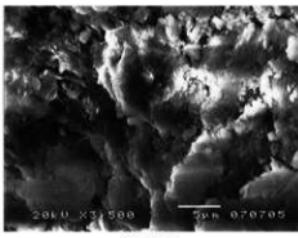
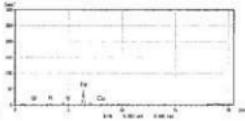
④の写真

No.183

①胎土部分1

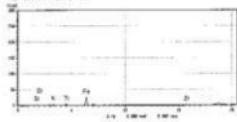


③内面赤色部分1

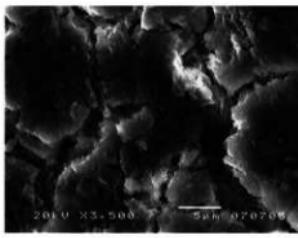
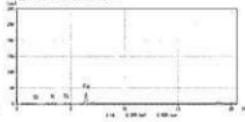


③の写真

②胎土部分2



④内面赤色部分2



④の写真

測定試料写真

第196図 赤色土器分析測定関係一覧

	青 磁	白磁・青白磁・青花	輸 入 陶 器	国産陶器等
C 期 11世紀後半 ～ 12世紀前半				
D 期 12世紀中頃 ～ 12世紀後半				
E 期 13世紀前後 ～ 13世紀前半				
F 期 13世紀中頃 ～ 14世紀初頭				
G 期 14世紀初頭 ～ 14世紀後半 及び それ以降				

スケールは不統一につき、本文中挿図参照のこと

第208図 持駒松遺跡中世出土遺物の編年

第XII章 発掘調査のまとめ

第1節 道構・遺物の概観

本遺跡からは、古くは縄文時代後期の遺物が出土するのを始めとして、近世までの道構・遺物を検出・確認することができた。以下、本遺跡の時代変遷について大まかに振り返ってみたい。

1 縄文時代

本遺跡に、最初に足跡を残したのは縄文時代後期の南福寺式、出水式土器の時期の人々で、雜いで入佐式、黒川式土器の時期の人々であるが、これらに伴う道構は残っておらず、土器などの遺物だけが若干残存しているのみである。その後、刻目突帯文土器を携えた人々がやってくる。おそらく、水田稻作を試みたのであろうが、この時期の明確な水田道構は検出されていない。このことから、この地に居住したわけではなく、より安定した地域へと移動して行ったと考えたい。

2 弥生・古墳時代

弥生時代の中期になって入来式、黒髮式、山之口式、須玖式土器を持った人々が渡来する。その後、後期に松木蘭式や中津野式土器を持った人々が来た。確実なところでは中津野式期の人が堅穴住居を作っていることから、この付近に小集落を営んだ可能性が考えられる。土坑や溝が掘られ、掘立柱建物も作られた。

古墳時代の初めの頃にも堅穴住居が営まれると共に、掘立柱建物も建てられていたようだ。多数のピットが検出されているほか、その周囲には溝を掘り、土坑を設けている。また、多数の土器も遺棄されており、それが土器溜まりとして検出されている。この土器溜まりには、壺形土器が多く含まれることから、祭祀的な意味を持つことが考えられる。中でも、「水辺の祭祀」の可能性が高いのではないかとの指摘もある(1)。須玖式土器等も見られることから、在地の人々でありながら、他地域からの製品が搬入された状況が見て取れる。

3 古代

古代になると、一気に人口が増えたと考えられ、掘立柱建物が多く見られるようになると共に、畑はある程度まとまった地域に、畠の長さが短く畠間が狭く耕されたものが数か所に見られる。畠の方向が上位と下位とで直交するか所もあることから、時期差・時代差と、耕作方法や作物に差異のある可能性もある。また、溝状道構は遺跡の南側を東西に限る深い大溝を始め、直線的なものに加えて弧状となる幅の狭い溝も数か所で見られる。また、畑も畠とは同様な方向に掘られている。

また、焼土のある土坑も確認された。炭化物や灰の集中がみられることから、焼成土坑や鍛冶場の可能性が想定される。また、調査担当者は地床炉と想定しているが、道構の性格を決定するには至らなかった。この時期には、一般的となった土師器や須恵器を使っているのを始め、カマド形土器も見られることから、そこに居住している人々については一考の余地を残している。それはまた、数多くの鏡書土器についても言える。「門」や「凡」「幸」「富」などに混じって「所」か「厨」かと考えられる文字も見られ、一般集落とは異なる性格を持つ可能性が考えられる。

古代の掘立柱建物跡は3間×3間の建物1棟以外は2間×3間の建物が5棟以上復元できたが、復元できなかつたものを入れると、もっと増える可能性があり、掘立柱建物としては2間×3間を基本として建てられていたと想定される。そのほかに2間×2間と1間×1間の建物跡がそれぞれ1棟ずつ復元された。これらは、柱間の間隔が梁間と桁行方向で異なっていることから、倉庫ではない総柱建物であると考えたい。

4 中世

中世になると、道構・遺物共に大きく増加し、本遺跡の主体をなす。掘立柱建物跡として復元できたものは少なく、わずかに3棟に過ぎないが、建物として復元できなかつた残りの大多数のピットは、多数の建物があったことを物語っている。復元された3棟のうち1棟については本遺跡中最大の規模を誇っている。2間×5間の梁間方向の2か所に、半間の庇が中央部だけに設けられており、古代の掘立柱建物跡とは様相を異にしている。中央部のみに庇を取り付けていることから考えて、この建物は2間×2間の建物2棟をつないだ「双堂形式」と考えたい。その場合、西側の1基のピットの欠損は、なんらかの原因で検出できなかつた可能性が高い。これ以外の建物は、2間×2間が1棟と、1間以上×3間の建物が1棟復元されている。また、堅穴建物跡も1棟確認されている。内部にピットが多数検出されているが、これは本道構の周辺に多数のピットが集中することから、全てがこの堅穴建物に伴うものとは考えられず、各辺2~3本の主柱であったと考える。

土坑墓と推定される道構も2基検出された。何れも埋土中の偏った場所に遺物が出土したことから、墓主の埋葬後に日常的に使用していたとみられる食器類を中心供獻した様子が窺える。形状は隅丸長方形と楕円形の2種類である。

石列も検出した。自然角礫が主体であるものの、中に

は五輪塔の笠石と考えられる人蔵的に加工された遺物も集中して出土している。細かく見るといくつかのブロックにまとまるような感じも受ける。これは、土砂で押し流されたというよりも、小さなまとまりとして遺棄された状況を物語っているように考えられる。前畠遺跡（薩摩川内市）で発見されたような石塔の基壇（鹿児島県埋文化センター2003）である可能性も指摘しておきたい。

これらとは別に、土師器の集積がT-13区において2か所で見られた。1号と2号は、それぞれ大型の壺1枚と小型の壺が2枚ずつで構成され、3号は小型の壺が4枚と大型の壺が2枚とで構成されており、いずれも南西方向から北東に向かって並べて置かれた状況が看過される。これに関する類例は西ノ平遺跡（薩摩川内市）【鎌倉時代前半期】や中福良遺跡（霧島市牧園町）【平安時代末～鎌倉時代初頭】などにみられ、祭祀に關係があるものと考えられている（中村2006）。なお、この一角は、周辺からは独立したような遺物の出土状況をしていることも、祭祀関連の遺構であるとの想定を裏付けている。

調査区の南側で、大溝が検出されたのを始め、矩形となる溝や短めの溝も散在している。畑は建物とは異なった地域に、ある程度広域に設けられた。この時期の畑は畝の長さが短く、狭い間隔では直線的に耕されたものと、畝の長さが長く、ゆったりとした間隔で地形に沿ったものか、ゆるやかな弧を描くように耕されたものとの2種類が見られるが、これは栽培していた作物の違いが反映された可能性もある。その畑を守るためにであろうか、杭が数多く打たれ、柵が設けられていた。これは、河川からの水の浸入から畑や作物を守るというよりも、部外者や動物などの侵入から畑の作物を守るためにある可能性が大きいと考えられる。なお、この杭列（柵）の跡は、柵でも後者のタイプの部分に集中して見られることを付記しておきたい。

遺物としては、土器・陶磁器類（糸切底の土器の皿や壺等のほか、東播磨系や桜万丈産（2）の須恵器、常滑・瀬戸・備前などの国産陶器、青磁・白磁等の輸入陶磁器、カミイヤキ、赤色・黒色土器や瓦器等）、石製品類（滑石製石鍋、砥石や硯等）、鉄器及び製鉄関連遺物類（刀子、火打金・鐵、鐵滓、繩羽口等）等が出土している。また、脚付土製煮炊具も出土しており、県内でも種類の多さや特殊性が指摘できる。土坑墓内からは白磁の合子も出土しており、一括資料として重要である。

これらの遺構・遺物から想定される中世の本遺跡の性格について考えてみたい。畑跡や多数のビットからは、一般的な集落の様相を感じられるするものの、復元できた大型の掘立柱建物跡は、全時代を通して最大規模であり、かつ二面に庇を有する双堂形式の建物と考えられる。また、豊富な国内陶器や輸入陶磁、東播磨系や桜万丈、カミイヤキといった遺物や、一般集落からはほとん

ど出土することのない桶型や和泉型の瓦器や硯、刀子、それに脚付土製煮炊具や土坑墓に供献された白磁の合子などから、この時期の一般的な集落とは全く異なる特殊な施設を想定したい。

それは、遺跡が南薩摩唯一の大河川、万之瀬川沿いに立地することを抜きにしては語れない。本遺跡の発見当時に大々的に取り上げられたような「万之瀬川河口付近に築かれた对外貿易的一大拠点であり、当時のその地方の実力者、阿多（平）忠景とのつながりも考えられる遺跡」との認識を認めるか否かについては置くにしても、このようなものを一般庶民が持ち得たとは考えにくい。これらの多種多様な遺物が出土していることから考えると、莊園の出先機関や在地領主層の施設、開墾地などのような特殊な遺跡と考えた方が相応しいようにも思えるのである。また、寺社などの領有地やそれらが經營主体となった地域や集落の一部との考えも、可能性の一つとして置くべきかも知れない。

5 近世

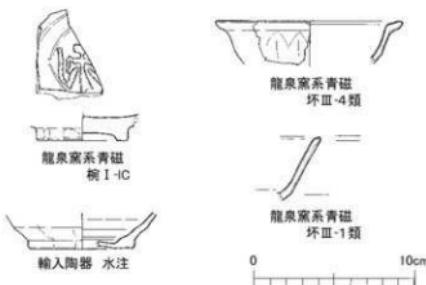
近世に入ると、薩摩焼や磁器が一部には見られるものの、その後ほぼ完全に耕地化している。近代になって南薩鉄道が縱断して建設されるという変化があったものの、そのまま現在に至ったと考えられる。

注

- (1) 中村直子氏（鹿児島大学准教授）の指摘による。
(2) 桜番城とする場合もある。ここでは桜万丈とした。

引用・参考文献

- 中村和美2006『まつりと信仰』「先史・古代の鹿児島（通史編）」鹿児島県教育委員会
鹿児島県立埋文化財センター2003『前畠遺跡』鹿児島県立埋文化財センター発掘調査報告書（56）
(繁昌正幸)



第197図 中世遺物

第2節 縄文時代～弥生・古墳時代の遺構・遺物について

縄文時代

縄文時代では、縄文時代後期・晚期の土器、石鏃、磨石、駿石等の石器が出土した。しかし遺構は検出されず、生活の中心地であった可能性は低い。後期では土器の口縁部が数点出土したのみで、縄文時代は晚期の遺物が中心といえる。晚期では黒川式土器が中心であるが、その前後の入佐式、千河原段階の遺物も若干見られた。

今回の万之瀬川流域の調査において縄文時代の出土状況を概観すると、本遺跡の上流側に隣接する渡畠遺跡では縄文時代後期以降の土器が、さらに上流側の芝原遺跡・上水流遺跡においては、縄文時代中期以降、前期以降の土器がそれぞれ出土している。このように万之瀬川流域の縄文時代遺跡では下流に下るとともに古い時期の遺物の出土が見られなくなる傾向が認められる。この傾向の示す意味については遺跡環境との関係をふまえながら今後検討していくべき課題としたい。

弥生・古墳時代

①遺構

遺構は住居跡5軒、土坑6基、溝状遺構5条、ピット群、土器溜まり1箇所が検出されている。出土遺物から弥生時代中期～終末期の遺構群と考えられる。

1号住居からは松木箇式～中津野式の特徴を持つ甕形土器の底部と共に袋状鉄斧(9)が出土した。袋状鉄斧は弥生時代中期～古墳時代初頭に北部九州を中心に全国的に出土する(注1)。木遺跡の鉄斧は袋部分がつながらないタイプで、このタイプは舶載品を模倣したものと考えられている(注2)。

2号住居では、須玖式の甕の口縁部や穿孔を持つ小型鉢形土器(15)が出土しており、弥生時代中期後半であると考えられる。15のような口縁部に2か所の穿孔つき突起をもつ鉢は、山ノ口式の模倣品であろう。

4号土坑からは山ノ口式(37)・黒髮II式(39～43)が出土しており、弥生時代中期後半段階の土器群であると考えられる。この一括出土品は、薩摩半島西部の松木箇式以前の段階の様相がよくわかる資料となっている。

土器溜まりからは松木箇式新段階～中津野式の土器が出土した。蓋には一条刻み目突帯を施すもの(90～95)と、大型で二条刻み目突帯を施すもの(88)、小型で無文のもの(105～112)がある。一条刻み目突帯のものは、口唇部をヨコナデし端部が少しくぼむ特徴をもつもの(90～92)や、底部にやや平底の形状を残すもの(90, 92)があり、古相を示すととらえられる。しかし、甕については口縁部の立ち上がりや形状が中津野式の特徴を持つ。一方、底部はやや踏ん張り気味の低い脚台などがあり、口縁部に比べて古式の様相を呈する。完形品がないため明確ではないが、甕の口縁部だけが新しい特徴をもっている(注3)。土器溜まりの特徴として、川岸近くで

検出されたことと大型の甕、小型の土器(手づくね土器など)が出土していることが挙げられる。類例として、鹿児島大学構内遺跡(釣田第8地点)と萩原遺跡がある。釣田第8地点では、河川運搬周辺に大量のミニチュア土器、大型甕が出土し、「特別な場所であった」と指摘されている(注4)。また、萩原遺跡でも河川跡に平行して大型の甕と高杯、鉢、甕の口縁部、底部等がまとまって出土し、「意図的に配置されていたもの」と指摘されている(注5)。上記の例は古墳時代中期の遺構であり、本遺構の年代よりもやや時代が下るが、「水辺」という場所、出土状況、器種構成の共通性からこの土器溜まりは水辺の祭祠遺構の可能性が考えられる。(注6)

②遺物

弥生時代の遺物は、完形品を含み多量出土している。各分類に土器形式をあてはめると以下のようになる。

I類：刻目突堤土器

II類：入来・山ノ口式土器

III類：黒髮式土器

IV類：須玖式土器

V類：松木箇・中津野式土器

これらは弥生時代中期後半から終末期の特徴を持つ土器群である。従来の編年観では、外來系は中期後半の須玖式、黒髮式、山ノ口式であるが、黒髮式の一部や山ノ口式は在地でつくられた可能性があり、異系統と位置づけられている土器群を含めてセットとして使用している可能性がある。上水流遺跡出土遺物中には、中期前半の土器群があるが、入来式と黒髮式が折衷したとみられる折衷形が在地の土器として製作・使用されている。本遺跡では、折衷形が形式変化したというよりも、異系統のものを併存して使用しており、この点で、松木箇遺跡出土遺物の特徴と類似する。器種組成の特徴として、高杯が大変少ないことが挙げられる。中津野式の時期から南部九州では高杯が普及し始めるが、薩摩半島西部地域は普及が遅いとされる。本遺跡もそれに合致しており、この地域の特徴をよく示した土器群であると言える。(注7)

(注1) 川越哲志(編)2000『弥生時代鉄器総覧』広島大学文学部考古学研究室

(注2) 沖村秀典 1997『鉄製工具』『弥生文化の研究』5 道具と技術 I 雄山閣

(注3,6,7) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授中村直子氏の指摘による。

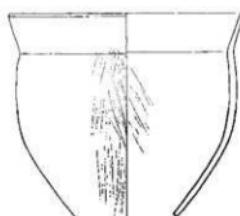
(注4) 橋本達也 2001「鹿児島大学総合研究博物館ニュースレター」No.2

(注5) 中村耕治 1980『大型甕およびその周辺』『萩原遺跡(II)』始良町教育委員会

(注6) 中村直子 2004『住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について』『鹿児島考古』第38号

壺形土器に見られる種子圧痕について

整理作業時に壺形土器中に初痕のような圧痕を有する土器を5点確認した(74,77,152,290,298)。これらのレプリカを作製し電子顕微鏡で観察した結果、初痕と考えられる資料を2点紹介する。なおレプリカ製作、顕微鏡写真撮影には永瀬功治氏の協力を得た。



第198図 資料1(74)

復元口径 26 cm の壺で、口縁部はく字状にかなり立ち上がり、胸部はあまり膨らまず外縁はケズリに近い板ナデ調整が施される。胸部最大径部付近の内面に 6×3.5 mm の初痕と思われる圧痕が確認された。



資料1圧痕部分拡大写真およびレプリカ

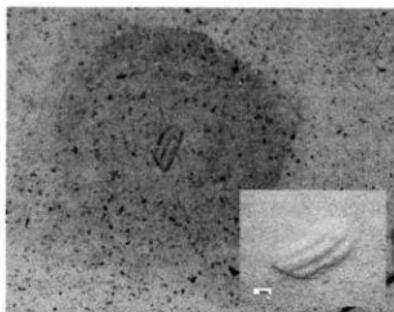


資料1圧痕レプリカの電子顕微鏡写真

資料1は初特有の顆粒状の粒が明瞭に観察できないが、両端部の突起の形状や中央部の筋状の起伏の形状から初痕の可能性が考えられる。土器満まり遺構に伴う中津野式土器の圧痕である。



第199図 資料2(77)



資料2圧痕部分拡大写真およびレプリカ



資料2圧痕レプリカ電子顕微鏡写真

資料2は資料1のように端部が観察できず全体の形状は不明だが、表面に初特有の顆粒状の粒と思われるものが観察される。また、表面の筋状の起伏も初に類似しており、初痕の可能性を指摘できる。本資料も資料1と同様に弥生時代後期～終末期の土器満まりに伴う資料である。他の資料についても顕微鏡で観察したが、初痕とは判断できなかった。

(富山孝一)

第3節 建物跡について

1 古代

① 挖立柱建物跡1号は本遺跡に最も普遍的な2間×3間の建物で、心心間距離は梁間が4.40m、桁行が6.13mで、面積は約26.97m²である。

各柱間は、梁間で2.16～2.22m、平均では2.18mとなり、桁行で1.78～2.18m、平均では1.99mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の大尺であると想定する。

② 挖立柱建物跡2号は調査ではピットを欠いているが、それを補って想定した場合の規格は、2間×2間の建物となると考えられる。

心心間距離は梁間が4.36m、桁行が4.41mで、面積は約19.23m²となる。

各柱間は、梁間で1.30～2.42m、平均では2.02mとなり、また、桁行で1.54～2.72m、平均では2.17mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の大尺であると想定する。

柱の位置が1間長さのものと同時に半間長さのものも見られることから、そのような柱間を持った建物として存在したのか、あるいは東柱などの支えを考えるべきなのか、さらには建て替えなどを考慮すべきなのかについては詳細は不明とせざるを得ない。

③ 挖立柱建物跡3号は下記の掘立柱建物跡4号と同一か所で検出されたことから、同一規模での建て替えと考えられるが、主軸方向も若干ずらしての全面的な造作であることから全く別個の遺構として取り扱った。

規格は、2間×3間で、心心間距離は梁間が4.28m、桁行が5.11mで、面積は約21.87m²となる。

各柱間は、梁間で1.90～2.25m、平均では2.05mとなり、また、桁行で1.52～1.82m、平均では1.68mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の大尺と普通尺の併用であると想定する。

④ 挖立柱建物跡4号は上記の掘立柱建物跡3号と同一か所で検出された。

規格は、2間×3間で、心心間距離は梁間が4.04m、桁行が5.12mで、面積は約20.68m²となる。

各柱間は、梁間で1.92～2.12m、平均では2.02mとなり、また、桁行で1.60～1.82m、平均では1.68mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の大尺と普通尺の併用であると想定する。

⑤ 挖立柱建物跡5号は調査区域の端部に当たっていたことから、2基ほどピットを欠くが、それを補って想定した場合の規格は、2間×3間となると考えられる。心心間距離は梁間が3.50m、桁行が4.79mで、面積は約16.77m²となる。

各柱間は、梁間で1.67～1.76m、平均では1.72mとなり、また、桁行で1.48～1.73m、平均では1.59mとなる。

のことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の普通尺であると想定する。

⑥ 挖立柱建物跡6号は、1間×1間の建物である。心心間距離は、梁間が1.65m、桁行が2.85mで、面積は約4.70m²となる。

各柱間は、梁間で1.35～1.65m、平均では1.50mとなり、また、桁行で2.65～2.85m、平均では2.75mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の普通尺と大尺の併用であると想定する。

⑦ 挖立柱建物跡7号は2間×3間の建物で、心心間距離は梁間が2.95m、桁行が3.98mで、面積は約11.74m²となる。

各柱間は、梁間で1.22～1.69m、平均では1.47mとなり、また、桁行で1.21～1.53m、平均では1.34mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の小尺であると想定する。

⑧ 挖立柱建物跡8号は唯一の3間×3間の建物で、心心間距離（注1）は梁間が4.89m、桁行が4.78mで、それに囲まれる面の面積は約23.37m²となる。

各柱間は、梁間で1.49～1.75m、平均では1.62mとなり、また、桁行で1.50～1.85m、平均では1.63mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の普通尺であると想定する。

⑨ 挖立柱建物跡9号は基本的に2間×3間の建物と考えられ、桁行のI基の柱穴が欠損した純柱建物であったと考えられる。

心心間距離は梁間が3.55m、桁行が5.56mで、面積は約19.74m²となる。

各柱間は、梁間で1.44～1.83m、平均では1.78mとなり、また、桁行で1.66～2.29m、平均では2.03mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の普通尺と大尺の併用であると想定する。

桁行方向のピットが南側で3基しかないは、I基の柱穴の欠損と考えられ、柱筋が整っていないのは、何らかの原因で外側に張り出した結果と考えられる。

⑩ 挖立柱建物跡10号は、柱穴の欠損が想定されることを考慮に入れても判然としない。2間×2間か、そうでなければ2間×1間の建物の北側に、半間の庇が取り付くもの、または2間×1間の建物の北側及び西側にそれぞれ半間の庇が取り付く、変則的な二面庇建物との想定も成り立つようと思われる。

心心間距離は梁間が4.35m、桁行が5.56mで、面積は約24.19m²となる。

各柱間は、梁間で2.65～3.37m、平均では3.04mとなり、また、桁行で1.95～2.94m、平均では2.39mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は、古代の大尺、または各柱間の距離を2間分と考えてその半分の長さを基本としたと考えれば1.52mとなるので普通尺が使

われていたものと想定する。

2中世

① 挖立柱建物跡1号は2間×5間の南北2方向の一部に、半間の庇が取り付くものである。

心心間距離は、梁間が3.79mで、桁行は9.48mで、面積は35.93m²である。また、二面の庇部分は、北側で梁間が0.78m、桁行が3間分で6.33m、面積が4.93m²となり、南側では梁間が1.08m、桁行が2間分で3.65m、面積は3.94m²となる。したがって、二面の庇を加えた面積は約44.8m²ということになる。

各柱間は、梁間で1.88~2.16m、平均では1.97mとなり、2間分の柱間が3.92mと4.00mであることから、これを加えた柱間の平均も1.97mとなる。また、桁行では、1.37~2.20m、平均では1.69mとなり、2間分の柱間が3.42mと3.85mで、それをつなぐ柱間の2.30mを加えた柱間の平均も1.70mという数字となる。このことから、梁間は中世の大尺を用い、桁行は普通尺を使っていると想定する。

また、庇の部分は、梁間が0.78~1.12m、平均では0.93mとなり、桁行が1.79~2.21m、平均では1.99mとなる。庇の幅は半間であるので、梁間の平均の数値を2倍すると1.86mとなる。そうであれば、中世の大尺が用いられた可能性が大きいものと思われる。

ここで、本建物跡の構造について考えてみたい。先述したように、本建物跡は2間×5間の南北方向に半間の庇が部分的に取り付く形の建物である。主屋部分を詳しく見てみると、中央部に2基の柱穴があることから、桁行方向がこれらの柱穴で2つに分かれて廊下のような状況となり、これを挟んで2棟が合わさった建物と考えることが可能となる。そうすると、2間×2間の建物が2棟合わせり、その間を1間幅の廊下様のものでつなぐことによって、総体として2間×5間に及ぶ桁行の長い建物としたのではなかろうか。北側には4基の柱穴が見られ、両端が欠失していることから、中央部の廊下様的部分を中心として対称の関係にあるのに対して、南側には3基の柱穴しか見られず、中央部分を中心とした対称の関係とはいえない。ただし、南側のみ庇による覆いを強くしているのはなぜであろうか。筆者は、南側の柱穴の1基は何らかの理由で検出されなかった可能性も指摘したい。事実、調査中の写真を詳細に観察したところ、欠失した部分に黒色の円形のシミがみられた。

② 挖立柱建物跡2号は調査区域外に延びているが、規格は2間×2間であろうと考えられ、複合する柱穴は、建て替えによる結果と考えられる。

心心間距離は、梁間が2.27m、桁行が3.32mで、面積は7.54m²となる。

各柱間は、梁間で0.93~1.31m、平均では1.21mとな

り、桁行で1.43~1.91m、平均で1.67mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は中世の小尺と普通尺であると想定する。

③ 挖立柱建物跡3号は、一部調査区域外に延びているが、規格は2間×3間であろうと考えられる。

心心間距離は、梁間が3.49m、桁行が5.62mで、面積は19.61m²となる。

各柱間は、梁間で1.69~1.80m、平均では1.74mとなり、桁行で1.86~1.89m、平均で1.87mとなる。このことから、本遺構で使用された基本尺は中世の普通尺と大尺であると想定する。

④ 挖立柱建物跡4号の内部南側には、2基の土坑が確認されており、本建物跡に付随する遺構と考えられる。1基の土坑は、建物跡の南側の中でも南に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ東西方向で52cm、短軸方向はほぼ南北方向で42cmあり、平面形は幅の広い楕円形である。深さは東側に16cmの最深部があり、西側にかけては緩やかな傾斜で上がっていく。もう1基の土坑は、建物跡の南側の中でも北に掘られた土坑である。長軸方向はほぼ南北方向で56cm、短軸方向はほぼ東西方向で28cmで、平面形は幅の狭い楕円形である。深さは最深部で13cmで、底面の形状は弧状を呈している。

これらの土坑の機能について考えてみる。1間×1間という極めて狭隘な建物の南側半分に、方向は違えるものの、隣接して掘られている状況である。この建物が高床式の建物であれば、床の下部に設けられていることになるが、本遺跡ばかりでなくとも、この時期の1間×1間の建物は、そのほとんどが平地式の土間建物であるとされている。このことから、おそらく板壁に囲まれた建物の地面の南半分の場所に、形状の異なるそれほど深くない土坑が掘られたということになる。

このような状況の遺構のあり方から考えると、地下への簡易な収納施設である可能性が考えられる。それも、土器などの容器などではなく、根菜類などの植物を一時的に埋めておいて、それほど時を経ずに掘り上げた状況が考えられる。

*中世の尺については、苦辛城の調査成果を参考にした。

・鹿児島県教育委員会1983『苦辛城跡』鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(27)

注

1 本文中ではビット間距離について記載したが、ここでは心心間距離で計測し直している。(繁昌正幸)

第4節 古代の遺物について

これまで旧金峰町内では、古代の遺跡が数か所で発見されており、この中でも特に小中原遺跡・山野原遺跡などは注目されている。

持林松遺跡においても、古代の遺物が相当数出土している。ここでは、当遺跡から出土した土器について、中村和美氏の年代観（中村1997・2006など）をもとに時代ごとに分類することとする。（第200図）

土師器

椀は、9世紀前半のものがほとんどである。これ以外には、器高の高くなる9世紀中頃のもの、体部の丸くなる9世紀後半のもの、高台の脚が長くなる10世紀前半頃のものが若干含まれる。

また、ビット内からは玉縁に類似した口縁部を持つものが出土している（13）。これは、古代の荊州窯系白磁（中国製）を模したものであろう。

环は、口径と底径の差が比較的少なく「箱形」を呈する8世紀末～9世紀前半のもの、口径と底径の差がある程度みられる9世紀中頃以降のものとにわかれれる。

皿・蓋は、基本的に8世紀代と考えられるものであり、椀・环と時代的に合致しない。今後の課題であろう。特に、ヘラ書きがみられる皿（317）は8世紀末～9世紀前半のもので、時代的な背景を窺わせる。

盤（109）も8世紀代に位置付けられるもので、外面に丁寧なミガキを施す。

壺は底部まで残存するものがないので様相がとらえにくい。ただし、「胴が張る」という比較的古式の様相を持つものが多く含まれることから、9世紀前半頃の可能性がある。また、成型時に胴部にタタキを施した後にハケ調整を行うものが多いのも古式の様相を示す。

黒色土器・赤色土器は、ほとんどが9世紀後半～10世紀前半のものである。ただし、黒色土器の中で体部の済曲が強く高台断面が三角形で、内面のミガキが良好に残るもの（115, 116）は11世紀代である。

その他としては、高环・鉢などがあるが明確な時期は特定できなかった。なお、ヘラ書き土器は基本的に9世紀代が中心である。特に完形の环で外底部に「凡」とヘラ書かれた完形の杯（350）は、9世紀中頃～後半である。

須恵器

碗・环は、8世紀後半のものを最古として、ほとんどが8世紀末～9世紀初頭である。また、中岳山麓窯群で生産された9世紀中頃以降のものも含まれる。

蓋は、ほぼ全てが8世紀末～9世紀初頭で、うち4点が鏡（転用鏡）として再利用されている。皿も蓋同様に8世紀末～9世紀初頭である。

壺・壺・鉢等については、ほぼ全てが9世紀中頃である。これらの中には県内でも出土数が少ないものが含まれており、注目されるものである。中でも、双耳环（215）は東北地方において、蝦夷に関わる遺物として扱われている（利部1998）。西日本での出土はごく少ないとされるが、県内でもその例にもれず現在のところ他に確認されていない状況である。

特殊遺物

小倉畠遺跡（姶良町）で出土した香炉（寺原2006）に類似した土器（252）と、鉄鉢形須恵器（瓦鉢）（23）が出土している。また、刻書土器の中には「聯」に類似するものが施されるものがある。香炉は仏具であり、鉄鉢は僧侶が托鉢で施食を受ける容器とされることから、寺院との関わりが強いとされるものである。「聯」は九字とされ修驗道などとの関わりが指摘される（坂本ほか2004など）。これらは、あくまでも類似品であるのでその性格については可能性にとどめたいが、少なくとも何らかの宗教的行為に関係していた可能性がある。遺物組成をみると（表75, 76）、土師器が全体量の3/4を占めることがわかる。土師器は椀・环が多く、須恵器は壺が多い。また、土師器の中の黒色土器・赤色土器は全体量からみるとほんの一部である。

註

坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由2004「墨書き土器の性格－鹿児島を例として－」『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

寺原徹2006「仏教関連遺跡としての小倉畠遺跡」「大河」第8号 大河同人

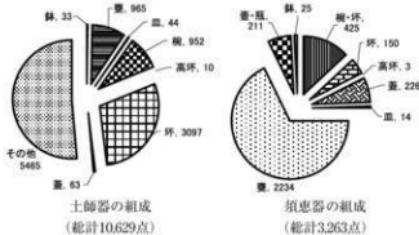
利部修1998「東北以北の双耳环と環状凸付長頸瓶」「秋田県埋蔵文化財センター研究紀要」第13号

中村和美1997「鹿児島県における古代の在地土器」「鹿児島考古」第31号 鹿児島県考古学会

中村和美2006「土師器と須恵器」「先史・古代の鹿児島通史編」鹿児島県教育委員会

（上床 真）

表75 古代遺物組成表（その1）



第5節 カマド・鍛冶関連の遺構・遺物について

持株松遺跡では、「移動式カマド」と呼ばれる遺物が出土している。これまで県内では、数例しか発見されていないものである。この遺物は形態はカマドに類似するが機能は明らかではない。ここでは移動式カマドではなく「カマド形土器」に名称を統一して論を進める。

本遺跡出土の「カマド形土器」は古代に該当するものであるが、全国的な例では、カマド形土器は古墳時代から存在することになっている。さらにカマド遺構も古墳時代に出現し、普及するという（石野1990）。翻って、鹿児島県内の事例をみると古墳時代にはカマドに関する遺構・遺物は発見されていない。そこで、ここでは県内において古代から散見されるようになるカマドに関する遺構・遺物について県内の状況をつかみ持株松遺跡の特性を明らかにするために、集成を行う。

また、中世については鍛冶関連遺構が発見されている。この鍛冶関連遺構については、カマド状遺構との区別が困難なものも存在するが、具体的な集成がなされていない。そこでここでは中世のカマド状遺構の集成も併せて行い、その傾向について明らかにしたい。

・古代のカマド・鍛冶関連遺構・遺物

(1) 遺物

まず、持株松遺跡ではカマド形土器が出土している。集成の結果県内では現在のところ8か所で発見されていることが明らかとなった（表77-①）。このうち、大隅では現在のところ後追遺跡と曲追遺跡の2か所しか発見されておらず、ほとんどが薩摩で占められている。また、遺跡の立地からみると内陸よりは海岸寄りの傾向がみられる。

(2) 遺構

古代のカマド状遺構は、その可能性のあるものを含め14か所で発見されている。このうち、12か所でドーム形の炉壁のみられるものや礎の集中が観察されている。特に、焼土の周間に礎が積まれており、カマドの痕跡とされるものも存在する（復崎A・中尾立・仁田尾中Bなど）ので前向きな検討も可能であろう。建物との関係をみると、堅穴住居に伴うものは2か所のみで、掘立柱建物に伴うもの4か所となっており、建物に伴わず単独で存在するもの8か所であった。

また、古代には軽石集積（焼土の周間に軽石が存在するものや、軽石が集積された遺構）も存在する（表77-②）。近年になって、高築遺跡で注目された遺構であるが、この遺構もカマドもしくは鍛冶に関連する遺構との指摘がある。この遺構については集成を行った結果8か所となった。8か所のうち4か所が曾於市内であり、この地域で顕著なことが想定されるが、薩摩地域においても4か所で発見されていることから、地域的な偏りではない可能性も

考慮する必要がある。ただし、軽石集積の中には、被熱痕跡のみられない遺構も存在するので、今後検討が必要である。また、高築遺跡の軽石集積5から鍛造洞片が検出されているので、鍛冶関連遺構としての検討も今後必要であろう。

遺跡の分布をみると、カマド形土器と比較してやや内陸よりの傾向がみられるようである。

なお、鍛冶屋馬場遺跡（薩摩川内市）等では、古代の鍛冶炉が発見されているが、形態のみでは通常の炉と大きな違いはみられない。今後は、炉状遺構が発見された場合は必ず鍛造洞片の有無を確認するような準備が必要であろう。

(3) 遺構と遺物の関係

カマド形土器とカマド状遺構の両方が発見されている遺跡は大島遺跡（薩摩川内市）だけである。このことから、両者は通常は共存するものでなく用途が異なる可能性が考えられる。稲田孝司氏によれば、カマド形土器は実用よりも祭祀的な性格が強いものであるという（稲田1978）。

例えば、曲追遺跡（霧島市）ではカマド形土器が発見されているが、遺跡内には性格不明の土坑が6基発見されている。この土坑内のうち2基からは、土師器窯の完成品が出土していることから祭祀的な性格が想定される。また、遺跡の全体的な傾向としては、碗・壺は多いが甌は少ない。ただし、カマド形土器とセットになる程度の量は存在する。さらに、甌に限定すると、包含層からの出土量よりも土坑埋土内からの出土量の方が充実している。この事実は、カマド形土器の特殊な機能を想起させるものといえよう。

また、県内出土のカマド形土器の表面を観察すると、煮炊きの痕跡があまりなく、あたたとしても煤・炭化物の付着が弱いという特徴があるので、日常用ではない可能性がある。

以上のことから、持株松遺跡出土のカマド形土器については祭祀的な性格を持つものと考える。具体的には、大阪府五反島遺跡でみられるような「水に関する祭祀」を想定したい。

・中世のカマド・鍛冶関連遺構・遺物

中世のカマド遺構について考察を行った研究はいくつかみられる。以下にそれらの内容を挙げる。

出口浩氏は、川上城の炉跡について平面形からA（円形）とB（長楕円形）の2タイプに分類している。

Aタイプは、円錐・角礎等が半円形か馬蹄形に並べられ、炉壁の高さ・灰出し部などが確認できないもので、臨時的あるいは短期的な利用がされたものとされた。

Bタイプは、炉部・たき口部・灰出し部などが区別されるもので、炉壁等は凝灰岩礎を含む粘土で焼き締めてしっかりと作られる。床面にも焼土・灰の堆積が多くみ

られる。地域の拠点となる山城・城館や中心部などにみられることから長期間に多くの人々が使用したものとされた（鹿児島市教委1994）。

今村敏照氏と中村守男氏は、馬場A・辻町2遺跡（大口市）の調査成果をもとに、県内発見のカマド状遺構について集成を行って概観した。カマドについて、燃焼室・焚口・灰溜めの3部分に区別している。ここでは特に、建物内か否かについて関心が持たれており、それに伴って性格付け（煮炊きされたものの種類・炉との判別等）などについてが課題であるとした（今村・中村1994）。

佐藤氏は、日輪城跡（曾於市）の調査成果をもとに、県内の炉状遺構が、城郭遺跡に集中する傾向のあることを明らかにした。また、炉状遺構を、①居住空間とは一線を画する「鍛冶炉」としての機能を持つもの ②居住空間と密接に関連する「カマド」的なものに大別した（佐藤2000）。

有川氏は、油須木城跡（鹿児島市）発見の炉状遺構について、出口氏の分類に従ってAタイプ（円形）とBタイプ（長椭円形）に分類を行い、その相違点について指摘している（有川2004）。

中世のカマド遺構が発見された遺跡の傾向をみると、20か所が城郭関連遺跡で、11か所が集落関連遺跡である。この傾向から、城郭に付随する場合が多いことが明らかになった。ただし、集落遺跡は中世前半（11世紀後半～14世紀前半）に、城郭関連遺跡は中世後半（14世紀中頃～16世紀中頃）にほぼ区分されることから、時期的なものとすることもできる。特に、城郭関連遺跡は15・16世紀をピークとするものなので、この時期に特化するものといえよう。

ただし、上ノ城跡（南さつま市）のように、遺構内から美山堂平窯（日置市）産とみられる製品（17世紀代）が出土している場合もあるので、中世としたものの中には厳密には近世前半期までを含む場合も考えられる。

鍛冶炉についても集成を行ったので、ここで触れた。佐藤氏も検討を行っているが、カマド状遺構と鍛冶炉の区別は困難な場合が多い。その中で、ほぼ明らかに鍛冶炉について集成したのが表77-③である。県内からは10か所で中世の鍛冶炉が発見されている。

この中で、特に上加世田遺跡の場合は、いわゆる炉状遺構で、通常は「カマド」とされる形態のものであるが、周囲から鉄滓・粒状滓・鍛造剝片などが出土していることから「鍛冶炉」とされるものである。この遺構に関しては、形態はカマドに類似することから、カマドが鍛冶炉に転用されたものと考えたい。また、上加世田遺跡は持林松遺跡を初めとする万之瀬川関連遺跡とも地理的に近いことを考慮すると、このような転用が万之瀬川関連遺跡でもなされた可能性もある。今後、検討したい事項である。

持林松遺跡で検出された鍛冶炉とされる遺構は、県内の資料を見る限り「ヒョウタン」形ではないことから、少なくとも「炉」としてもよいものであろう。さらに、形態のみからの性格付けにはなお検討を要するが、鉄滓・鍛造剝片の存在から「鍛冶炉」とみなしてよいと考えたい。

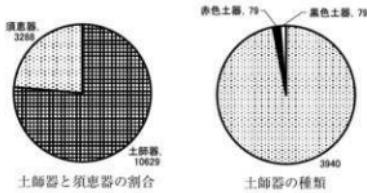
(4) おわりに

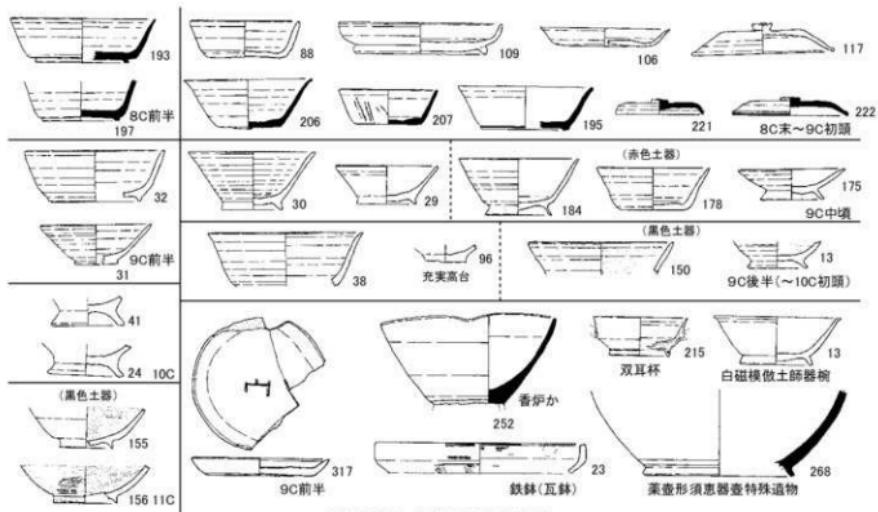
最後に、南島のカマド状遺構についても触れておきたい。特に大島郡を中心とする南島では、焼土が非常に多く検出される。ただし、あまりにも多く検出されることから、近世以降の製糖に関するものとされて調査されないことが多いという。実際に、あやまる第2貝塚（奄美市）で発見された遺構は、江戸時代から昭和初期の製糖跡（サタヤドリ）とされるものであるが、形態がしっかりとしていたために記録された希有な例（笠利町教委1984）で、通常は時期不明の地床炉に類似遺構は記録される機会がないという。シラス台地上などで発見される「芋穴」と同じような扱いである。筆者はこれらの遺構についても、歴史を語る資料として状況が許せば平面記録だけでも必要ではないかと考える。この問題は、今後の課題として残すことにしてみたい。

参考文献

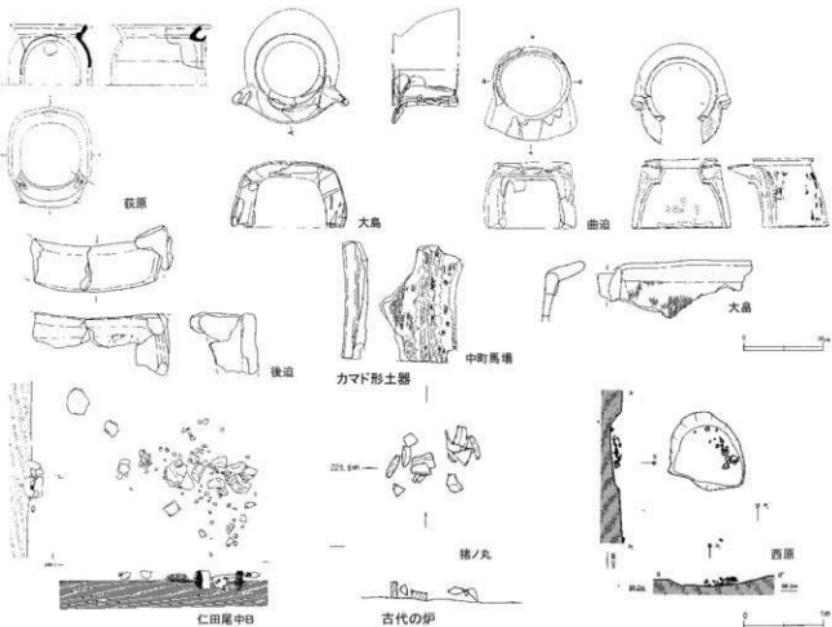
- 有川孝行2004「まとめ」「油須木城跡」郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）郡山町教育委員会
石野博信1990「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
植田孝司1978「忌の竈と王權」『考古学研究』25-1 考古学研究会
今村敏照・中村守男1994「大口市馬場A・辻町2遺跡におけるカマド跡」「大河」第5号 大河同人
笠利町教育委員会1984「あやまる第2貝塚」笠利町文化財報告書（7）
佐藤亜型2000「炉状遺構についての一試論」「日輪城（恒吉城）跡」大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（20）鹿児島県大隅町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
出口浩1994「配石炉跡について」「川上城跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）鹿児島市教育委員会
(上床 真)

表76 古代遺物組成表（その2）





第200図 古代の遺物の分類



第201図 カマド関係（その1）

表77 カマド関連遺跡一覧表（その1）

順位	遺跡名	所在地	時期	遺 物 名		備考	文献
				種類	名		
1	始興	始興市白井町平野字宇摩原	古代	移動式カマド	窓内側の資料	町 (1) 1978	
2	後原	始興市大河内町植木字後原	古代	移動式カマド	窓内側の資料	町 (6) 2003	
3	前原	始興市大河内町植木字前原	古代	移動式カマド	3脚跡あり	町 (4) 2004	
4	大島	高岡市大河内町大字大島	古代	移動式カマド		町 (8) 2005	
5	中町瓦場	高岡市内木町西字中町瓦場	古代	移動式カマド		町 (2) 2004	
6	安原ノ原	いじら市野町大字安原	古代	移動式カマド		理セ (11) 2007	
7	大崩	いじら市野町下字大崩	古代	移動式カマド		町 (1) 2006	
8	御所	高岡市木之本町御所字御所	古代	移動式カマド		未収録	
9	古町	高岡市木之本町古町字古町	古代	カマド	カマド跡?	理セ (25) 2000	
10	松尾城跡(安功寺跡)	高岡市木之本町松尾城跡	古墳	カマド	カマド跡?	町 (7) 1987	

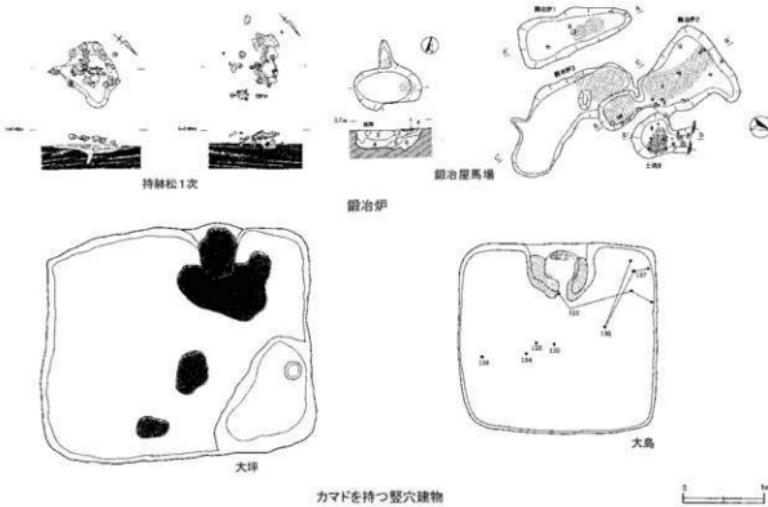
順位	遺跡名	所在地	時期	石棺石室墓出土遺物		備考	文献
				種類	名		
11	通塚	富山市射水町通字通	古墳	石棺	4基。壁面なし。	理セ (7) 2004	
12	通塚	富山市射水町通字通	古墳	石棺	5基。壁面なし。	理セ (71) 2004	
13	荒原	富山市射水町通字荒原	古墳	石棺	6基。土室表面突出。搬出土。無地。	理セ (73) 2004	
14	下永瀬A	日置市伊集院町下口字下永瀬	古墳	集石	隣接して六個穴構造。	理セ (72) 2004	
15	上ノ平	日置市伊集院町上ノ平字上ノ平	古墳	中軸石	ビト内に地中に積んだものあり。被築なし。	理セ (70) 2004	
16	船山	日置市木之本町船山字船山	古墳	道込みのある土室	4号室に土室に積んだものあり。被築なし。	理セ (98) 2005	
17	東原	日置市木之本町東原字東原	古墳	土室	土室に積んだものあり。被築なし。	未収録	未収録
18	西原	日置市木之本町西原字西原	古墳	土室	土室に積んだものあり。被築なし。	未収録	未収録
19	谷山円墳群	鹿児島市谷山町谷山	中世	坐禅跡	石棺・櫛・骨は土室に積んである。	市 (11) 1992	
20	鹿原	日置市伊集院町下口字鹿原	中世	粗石集石	粗石は土室に積んである。	理セ (94) 2005	

参考文献

- 稻田孝司1978「『みみの墓と王墓』」考古学研究 25-1 考古学研究会
 稲井健1993「『圓の墓と王の墓』」考古学研究 40-1 考古学研究会
 佐々木洋一1994「『圓の墓と王の墓』」考古学研究 51-1 考古学研究会
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2000「『日置城(伊集院城)跡』大隅頃埋蔵文化財調査報告書 (20)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2001「『上ノ平』高岡市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (70)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2002「『下永瀬A』日置市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (71)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2004「『美東・西東・中峰・南峰』鹿児島市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (64)」
 全日本町村教育委員会2003「『船山』・『吉子』・『上水木』・『C-D』・『大島』・『大崩』・『御所』・『大坪』・『安原ノ原』」
 宮野町教育委員会1993「『第1丸道跡』・『第2丸道跡』・『第3丸道跡』・『第4丸道跡』」
 高岡市立埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)」
 鹿児島市立埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)」

報告書

- 始興市教育委員会1978「『薪炭遺跡』」始興市免耕地監査報告書 (2)」
 大隅町教育委員会・財元宮寺文化財研究所2000「『日置城(伊集院城)跡』大隅頃埋蔵文化財調査報告書 (20)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2001「『上ノ平』高岡市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (70)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2002「『下永瀬A』日置市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (71)」
 鹿児島市立埋蔵文化財センター2004「『美東・西東・中峰・南峰』鹿児島市立埋蔵文化財センター-1号圓形墓調査報告書 (64)」
 全日本町村教育委員会2003「『船山』・『吉子』・『上水木』・『C-D』・『大島』・『大崩』・『御所』・『大坪』・『安原ノ原』」
 宮野町教育委員会1993「『第1丸道跡』・『第2丸道跡』・『第3丸道跡』・『第4丸道跡』」
 高岡市立埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)」
 鹿児島市立埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)」



第202図 カマド関係（その2）

表78 カマド関連遺跡一覧表（その2）

番号	遺跡名	所在地	時期	遺構名	備考	文献
31	仁田中申田	鹿児島市石谷町仁田中申田	古代	1・2号製陶炉	石組み伊・床跡伊。	昭セ(110) 2007
32	山神	鹿児島市高尾町屋守山神	古代		床跡伊・施設社殿内。	昭(7) 1997
33	石打	鹿児島市高尾町(田舎町)三西石打	古代	2号窯4基・3焼成炉	印内1号から土師器・安室岩塚など出土。被焼。	昭(4) 1999
34	猪ノ丸	鹿児島市高尾町(田舎町)猪ノ丸	古代	配石通路	印内1号から骨器、被焼。	昭(3) 1995
35	中牟立	鹿児島市高尾町(田舎町)中牟立	古代	4号窯内にカマド遺跡焼成窯あり。他は施設伊。	昭(2) 1994	
36	鹿児島川	鹿児島市十二丁目字下里・機能丸	古代	地炉跡	獨立式地炉。	市(16) 1994
37	高見	鹿児島市高見町高見字高見	古代	古窯跡	圓筒形の窯跡。二重窓・窓枠・被熱石。。	昭(10) 1994
38	高麗	鹿児島市高麗町高麗字高麗	古代	古代地盤上・古窯窯場跡	窯跡標記第1号。被熱石1つ。	昭(7) 2004
39	中野西(木本庵A)	鹿児島市中野町中野西	古代	11号窯	古代のものとの可否未定。	昭(7) 2004
40	櫻井	鹿児島市櫻井町櫻井	古代	円筒土坑	土坑のふたがある可能性あり。	市(83) 1992
41	西岸	日置市伊集院町西岸	古代	猪土坑	猪・船跡。	昭セ(58) 2003
42	小黒	鹿児島市金峰町成之名字小黒	古代	地炉跡	カマドと窓穴付住居合世紀。	昭(11) 2000
43	大坪	北九州市美術館・黄金寺字大坪	古代		カマドと窓穴付住居合世紀。	昭セ(79) 2005
44	大島	鹿児島市大島町大島字大島	古代		伊伊坂1号・1つに前部入り。	昭セ(80) 2005
45	加那山	鹿児島市上野町加那山	中世	中世カマド	伊伊坂1号・1つに前部入り。	昭(16) 1981
46	成田	鹿児島市内中種子町成田	中世	中世カマド	伊伊坂1号・1つに前部入り。	昭(28) 1983
47	東原	鹿児島市内東原町東原	中世	中世カマド	伊伊坂1号・1つに前部入り。	昭(29) 1983
48	鶴・河原跡	鹿児島市内東原町河原・鶴	中世	カマド	伊伊坂1号・1つに前部入り。	昭(8) 2004
49	西・平	鹿児島市内中馬田町西・平	中世	カマド2基	粘土壁のもの4基、石組み1基。うち3基は建物内。	昭(29) 1981
50	上・城	鹿児島市内中馬田町上・城	中世	1～2号炉	2から3段もしくは4段の1周出土。(近世瓦まで継続か)。	市(2) 1990
51	上加世田-1(第三高地)	鹿児島市吉田郡川辺町上加世田	中世	カマド1号・2号	宝町時代。	市(3) 1995
52	平家跡	大口町平家字平家	中世	伊伊坂5・6・7	窓石は被熱。	市(1) 1962
53	針削	鹿児島市金峰町花瓶山針削	中世	伊伊坂窓	住居跡のC14から17世紀代。	昭(14) 2003
54	上狹田A・B	鹿児島市金峰町上狹田A・B	中世	カマド	駆除発掘。	昭(15) 2003
55	金丸跡	鹿児島市大隅町金丸寺跡・久丸	中世	粘土壁う1号窯	土坑17から2個焼成(断面)が出土。鞋石やゲートをつくも。	昭(4) 2005
56	下原	鹿児島市大隅町下原	中世	粘土壁う2号窯	粘土壁う2号窯。	昭(5) 1991
57	田代城跡	鹿児島市田代町田代	中世	土坑1号	粘土壁・被熱・窓構造9口窓石・壁・石臼・鉄輪・被熱あり。	市(11) 1992
58	川上城跡	鹿児島市川上町川上	中世	粘土壁	粘土壁・被熱。	市(18) 1994
59	山谷城跡	鹿児島市山谷町下原	中世	石臼跡	中世から「山谷時代か?」。	市(31) 2000
60	南原城跡	鹿児島市南原町南原字下原	中世	カマド跡	中世。	昭(4) 2004
61	御城城跡	鹿児島市御城町御城内	中世	カマド跡	15-16C 40×40cm 粘土。	昭(7) 2007
62	知城城(鹿之城跡)	鹿児島市知城町永水城跡	中世	カマド跡	カマドから土壁・石組・鞋石。	昭(12) 2006
63	牟礼・城	鹿児島市牟礼町牟礼山江	中世	窓石・通路	16世紀・被熱・土壁・石臼。	昭(4) 1993
64	一字城城	日置市伊集院町一字城	中世	1トレーン伊集院	被熱・土壁。	昭(5) 1991
65	鹿原	日置市日置町吉原西山鹿原	中世	伊伊坂	被熱。	昭(4) 2003
66	隼人城跡	鹿児島市隼人町隼人字之川	中世	窓石	円筒窓石の跡は甚多。16-17世紀。	昭(2) 2000
67	松元町(1)の跡	鹿児島市松元町松元	S・L	1-4号窯	1-10号窯・3-12号窯の埋蔵。	昭(14) 1994-(5) 1995-(6) 1997
68	牛之城跡	川内市牛之城下原	中世	粘土壁・窓石	カマド1号(10×10cm)、窓石と多少違うとの意見不同。通路内・堅江壁跡あり。	市(4) 2003
69	松原城跡	川内市松原町松原字下原	中世	石臼通路	スズメ村・安室岩塚 大火をった生産通路か?	市(10) 1999
70	馬鹿	大口町平字平家字馬鹿	中世	カマド跡・2・3	1は建物内。	市(13) 1994-(15) 1996
71	辻町2	大口町平字平家字馬鹿	中世	カマド2基	16世紀・被熱・土壁。	市(13) 1994-(15) 1996
72	日置城(哲古城)跡	鹿児島市日置町哲古字築	中世	中世の炉底跡焼成5基	窓石の跡がある伊伊坂。	市(3) 2006-町(20) 2000-24) 2002
73	手手ノ上	鹿児島市来間町手手木手手ノ上	中世	董石	董土なし・大手の窓ガラ数個・砾石・紡錘頭出土。	昭(8) 1989
74	横川城	鹿児島市横川町中字横川	中世	61・1-3	主に16・爆弾240cm。	市(1) 1987
75	芝原	鹿児島市金峰町芝原字芝原	中世	カマド	切り離し保証を行っており、展示中。	未報告
76	上原	鹿児島市上原町上原上原	中世	カマド	主に瓦窓行。	未報告
77	下山田(1)(東地区)	佐多市下山田町下山田	中世	窓石	10-12-13世紀。	昭(6) 1989
78	ハーラ	大隅市森町西山字ハーラ	中世	11号窯	明太屋・被熱。	昭(2) 1987
79	オシ塙	大隅市森町字小津塙	中世	1・2号窯	カム・ヤキモチ・被熱。	昭(5) 1983
80	堀	鹿児島市川辺町下原下原	中世	地爐丸・通路	沼尻カマド・藤原抄持・前原海跡出土。	昭セ(78) 2004
81	地頭屋星跡	鹿児島市山田町木下私屋	古墳	カマド・通路	カマド。	昭(44) 2006
82	川の上・中ノ丸	鹿児島市大泊町松原川の上・中ノ丸	近世	通路1-5(カマド)	16世紀山口から近世の獨立柱建物多い。	市(74) 2004
83	御前	鹿児島市吉田町下白羽御前	近世	伊	佐世谷社跡物語跡山内。	昭(2) 2005
84	切石	鹿児島市鳥島町防波堤の裏	近世	配石炉	3つの石舟を用いて調製鍋出土。	鹿本大治研究会(1) 1994
85	あやまの第2回塙	鹿児島市笠利町胡野字大塙	古世	サカナリ・薬師院品	江戸一筋和村。	昭(7) 1984



第203図 カマド関係（その3）

第6節 鹿児島県の紡錘車について

1はじめに

本遺跡からは、土師器製の紡錘車が7点、鉄製紡錘車が3点出土している。県内では、土師器製及び鉄製紡錘車が同じ遺跡で出土した例は少ないと、転用品を含めた紡錘車の集成は行われておらず、研究も進んでいない。ここでは紡錘車資料を集成して若干の検討を行い、本遺跡における紡錘車資料の意義や遺跡の位置づけについて考えたい。

2考察

紡錘車は、一般的には正面観が円形を呈し中心部に穿孔を有する資料として認識されている。材質は、「石・土器・骨角・木・金属など」あるという（藤村淳子1997）。

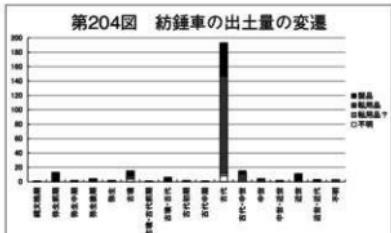
繩文期における本県の有孔円盤状製品を観察すると、周縁の調整が粗い資料が殆どであり、本県出土の古墳時代以降の土師器転用品に見られる周縁部の丁寧な調整とは明らかに趣を異にする。

中間研志氏は、「当初から紡錘車として作った方が製作途中の失敗も少なく、より確実に得られるという常識的判断」から、土器小片転用の有孔円盤状製品は「中古の中国の最古期や、朝鮮半島の若干の例外を除いて、その大多数は紡錘車ではないと判断したい」（中間1985）と述べる。筆者は特段判断を下し難い資料等持たないでの、繩文後・晚期の有孔円盤状製品については、ここでは取り上げないことにする。

弥生時代以降については、土師器等転用による有孔円盤状製品と共に穿孔されない円盤状の土器製品については、未製品の可能性を想定し集成に含めた。以下に各時代の量的・質的な状況を、紡錘車の材質や形態等の比較を通して県内の紡錘車の状況を概観する。

(1) 弥生時代の特徴・傾向

出土点数は20点程度であり、量的には古墳時代と大差はない（204図参照）。弥生前期の資料が12点と多いが、高橋I式土器と共に高橋貝塚出土の資料である。



形態については、高橋貝塚出土の紡錘車中2点は、正面観がつまみ蓋状の独特な器形を呈しており、「板付孤

状溝列の系統に位置づけられるが、(内1点は)側面に沈線を巡らせ曲がり田期の特徴を残す」(中間1985)とされる。その他の資料に関しては、いずれの正面観も円盤状を呈する。

材質を見ると、高橋貝塚資料はいずれも土器であるが、その他の資料は石製である。大原・宮蘭遺跡出土の弥生後期の資料中、2点の土製品を紡錘車に含めたが、亀の腹の甲を材質とした紡錘車に伴う穿孔のない円盤状製品であり、「メンコ」の可能性もある。土器の転用品が少ない点は、宮崎県の「土器をうちかいて成形した転用品が目立たない」(日高2006)との傾向と類似する。

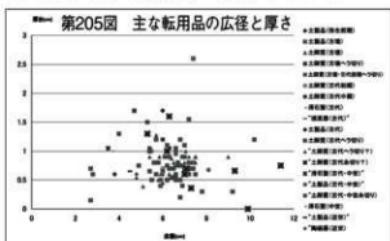
(2) 古墳時代

弥生時代には殆ど見られなかった転用品が出現し、製品と同率を占める。円盤状が殆どであるが、つまみ蓋状の資料が1点、算盤玉状の製品が1点出土しているのが特筆される。つまみ蓋状の紡錘車は鹿児島大学構内で出土しており、他県の類似品との比較から5世紀後葉から6世紀初頭の時期が比定されている(甲斐康大2006)。隣の宮崎県では、算盤玉状の形態が弥生時代に存在するが、本県の同種資料が比較的宮崎県と近距離である東田遺跡(肝付郡高山町)で出土している。

転用品の多くが土師質であることと併せて、製品中、土製品及び土師質が1/3以上を占め、石製と続く。

(3) 古代

それまでは数十点であった出土数も、古代になると200点程度に増える。多くは転用品である(204図参照)。特筆事項としては、鉄製紡錘車の出現が挙げられる。



当該時期のものは、全て円盤状を呈する。転用品の多くが土師器底部の再利用である。円形を呈する土器器の底部は加工しやすいことから転用素材として適していたのであろう。

底部の切り離し痕と、広径との関係をみると、ヘラ切り痕ありの紡錘車の方が糸切り痕ありのものよりもややばらつきがみられるが、顯著な差異ではない(2025参照)。一方、土師転用品の広径の散布状況は4~8cm程度と広いのに対して、鉄製紡錘車の広径は4~6cmの間に収まり、鉄製紡錘車が他の材質の紡錘車よりも画一性

が高いという事実は滝澤亮氏の指摘と合致する（滝澤1985）。また、堀田孝博氏は鉄製紡錘車の出現と普及の背景を考察する中で、転用紡錘車の出現が庸調絹・布の粗悪化をまねき、「それへの国家的対策」として鉄製紡錘車が普及したと分析する（堀田1999）。

転用品の多くは、鞆や高台付鞆に比して坏の底部を再利用している。これは体部に加えて高台を打ち欠く手間を避ける意識が働いていた可能性がある。石製については、石材の記載がないものも多く確認できなかつたものがあった。確認できたもののでは、砂岩や泥岩、粘板岩製がほとんどを占める。石材をみると、砥石に使用される石材が含まれることが注目され、「材質が砂岩や凝灰岩に限られており、その形状からもある程度使い込んだ砥石の形を調整した」（堀田1999）との指摘もある。しかし、砥石の再利用と指摘された事例は見られない。鉄製紡錘車については、紡錘14点、紡茎4点の計18点の出土が確認された。小中原遺跡・複崎A遺跡・小倉畠遺跡・鍛冶屋馬場遺跡・市ノ原遺跡5地点・持株松遺跡から出土しているが、特に地理的傾向は見出されない。6か所中、鍛冶屋馬場遺跡6点、市ノ原遺跡5地点4点、持株松遺跡3点、小倉畠遺跡2点と4遺跡で複数出土するが、鉄製紡錘車の出土が遺跡の性格を意味するものなのか、保存に適した埋土状況を示すものかは、現況では確認できない。

（4）中世

古代に200点近く出土した紡錘車は、中世になると激減し、転用品が殆どを占める。ただし、鉄製と木製の紡錘車の普及も想定されることから、出土数の割合が当時の紡錘車の割合を示していない可能性がある。

形態は古代同様、全て円盤状を呈する。材質について、土師質と石製に加え須恵器や滑石製石鍋の転用品も含まれる。ただし、鉄製紡錘車は出土していない。

（5）近世

本県では、可能性を含め製品13点、不明3点の報告がある。なお、宮崎県では「漁労用の網ひもをよるために大型品の民俗例が残る」が、一般的には「近世になると消滅」するという（日高2006）。本県資料中にも、その形態や材質から紡錘車としての機能が疑われる資料が含まれており、宮崎県と同様な傾向が見出される。

円盤状に加え、双穿状が出土している。紡錘車と報告されているが、形態からみて土鍤の可能性が高い。材質に関しては、製品として、土師質製品14点、蛭石製2点の報告がある。転用品は極僅かで、土製品と陶磁器製がある。

3 結論

紡錘車は、その出自から製品と転用品に分けられる。

弥生・古墳時代は製品が多く、古代に転用品が主流を占める。古墳時代の紡錘車は少量であるが、同時代の土器の空巻刻みに布目压痕を有する資料が確認されることに注目したい。「弥生時代の終わりから古墳時代の壺や壺に多」く、「布目压痕で確認できる布の織は細かく、その布地の素材や織りの種類は特定できない」が（中村直子2005）、紡織の例証の一つと捉えられる。他には土器底部に糸による丁寧な編み痕が残される資料も散見されるなど、紡錘車が一定量使用されていた可能性を示唆する。古代になると、紡錘車の出土量が激増する。宮崎県においても、紡錘車出土数の増大化と、土器転用の割合の高さが指摘され（日高2006）、本県同様の傾向がうかがえる。古代の量的な突出は、南九州における古代前後に、紡織を巡って量的・質的に周期的変化があった可能性を示す。紡錘車の増加の主な要因としては、律令制度に基づく調庸の負担が挙げられよう。10世紀成立の「延喜式」には、大隅国・薩摩国とともに調庸としての布の課税が記載されている。なお、「延喜式」民部下に「隼人調布」が見えることから、調の布と隼人調布とは規格が異なっていた可能性が指摘（永山2006）されており、紡錘車との関連で注目される。質的変化に関しては、鉄製及び転用紡錘車の出現期と、調庸布の粗悪化する時期がほぼ同時期であることから、古墳・古代期における紡錘車の質的・量的変化と調庸に係る国家の政策との関連性を指摘する意見がある（堀田1999）。また、京田遺跡で古代の木製紡錘車が出土しているという事実から、県内においても少なくとも古代以前には木製紡錘車が普遍的に存在した可能性がある。県内では、弥生後期では大原・宮蘭遺跡（薩摩川内市下原町）の壺棺付近から、古代では複崎A遺跡（鹿屋市）の周溝墓から鉄製紡錘車3点、小倉畠遺跡（姶良町）の周溝墓から紡茎2点、古代・中世では山崎B遺跡（湧水町）と薩摩国分寺（薩摩川内市）の土坑内から1点ずつ出土している。県外の事例とは時代的差異があるが、紡錘車が埋葬儀礼に関係する可能性についても指摘したい。

このことから、持株松遺跡出土の鉄製紡錘車についても祭視的な行為に使用された可能性があるといえよう。今後は、周辺地域を含め他県の事例とも比較検討しながらより詳細な分析を行って明らかにしていく必要がある。

引用・参考文献

- 藤村淳子1985「紡錘車」「弥生文化の研究」第5巻 道具と技術 I 雄山閣
中間研志1985「紡錘車の研究」「石崎曲り田遺跡－Ⅲ－」福岡県教育委員会発掘調査報告書第11集 福岡県教育委員会
日高優子2006「宮崎県内における紡錘車の様相」「宮崎考古学会発表レジュメ」
甲斐康大2006「資料紹介」「News letter」鹿児島大学

聯合研究博物館

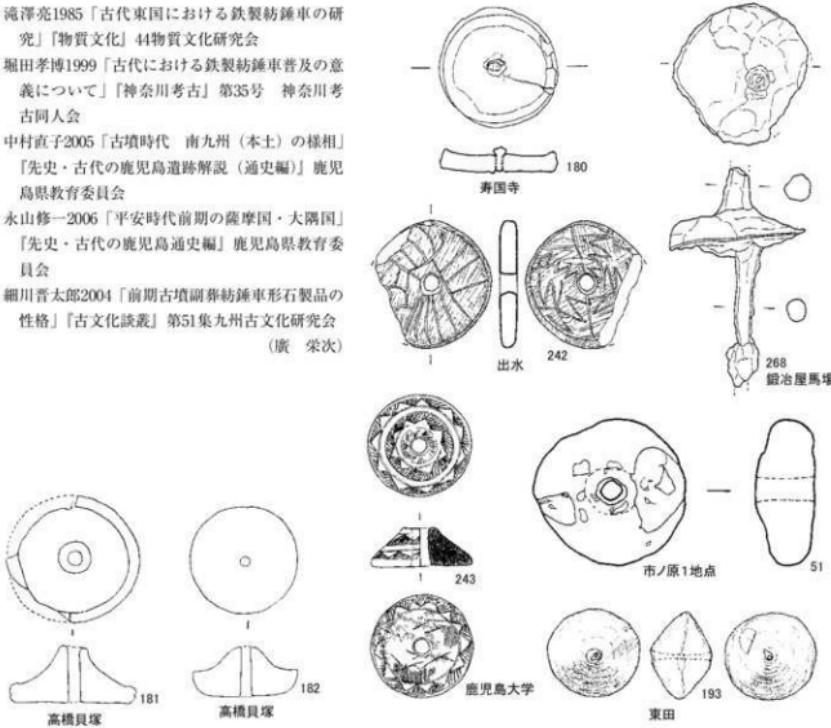
滝澤亮1985「古代東国における鉄製紡錘車の研究」『物質文化』44物質文化研究会

堀田孝博1999「古代における鉄製紡錘車普及の意義について」『神奈川考古』第35号 神奈川考古同人会

中村直子2005「古墳時代 南九州（本土）の様相」
「先史・古代の鹿児島遺跡解説（通史編）」鹿児島県教育委員会

永山修一 2006 「平安時代前期の薩摩国・大隅国」
『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会

細川晋太郎2004「前期古墳副葬鋸鍼車形石製品の性格」『古文化談叢』第51集九州古文化研究会
(廣 栄次)



第206図 県内出土の特徴的な紡錘車（スケールは不統一）

表79 紡錘車一覽 (1)

石製的簡單一些

257

表80 紡錘車一覽 (2)

表81 紡錘車一覽 (3)

第7節 古代赤色土器について

南九州の古代には、土器の内面あるいは外面に赤色顔料が施されている土器がある。黒色土器が内黒、両黒と俗称されているが、これに対応するように、内赤、両赤などと呼ばれたりする。一般的に使われてきた名称としては「内赤土器」や「内朱土器」である。だが、必ずしも統一された名称ではなく、各報告書によってその名称は様々である。

この土器は、特に鹿児島県内でも現在の日置市周辺に多いようで、宮崎県や熊本県の場合は南部すなわち鹿児島県側でわずかに出土する傾向にあり、出土事例は増加の一途を辿っている。

持株松遺跡でも、この資料は出土しており、隣接する渡畠遺跡や芝原遺跡においてもまとめて出土している。当遺跡の場合は、主体を成す時期が若干下るために、この赤色土器の出土量は少ない。しかしながら、古代末の阿多地方の様相を知る上でこの土器は欠かすことの出来ない資料であり、ここでは、出土遺跡を集成することで空間的な広がりについておさえていきたい。

なお、本報告書において、名称は八木澤一郎氏の述べるとおり、「赤色土器」を用いている。この点に関しては、研究史を振り返って確認していきたい。ただし、本県において赤色土器を題材として取り扱った論考は極めて少なく、発掘調査報告書の記述等を中心に先行研究等を紹介していきたい。

旭慶男氏は、「内黒土器と同じ方法で赤色顔料を内面に塗り込み丁寧に磨いたもので内朱土器と呼ばれている」と、その製作技法に着目している（旭 1987）。

中村和美氏は、その呼び方に対して「内面に塗られている顔料が、水銀朱ではなく、ベンガラ」である点から、従来呼ばれてきた「内朱」ではなく「内赤土器」であると指摘する（中村 1994）。さらに、「技法的には内面にヘラミガキを施す点は黒色土器と同様である」としている。また、成川式土器の中に、「ベンガラによって彩色された土器がみられるが、この伝統をひくものとも考えられるがその系譜がたどれるかは今後の課題」とし、その系譜について可能性の1つを指摘している。

池畠耕一氏は、日置市吹上町の古代を概観して、「県内の他地域では出土数の少ない内赤土器が（中略）多く出土している」点を指摘し、「その製作地など興味深い資料」であるとしている（池畠 2003）。これは、分布域に特徴が見られる点を具体的に示したものであった。

八木澤一郎氏は、「内面だけでなく、外面にも赤色顔料を塗布」する資料がある点を指摘し、「黒色土器にならない」赤色土器と呼んだ（八木澤 2003）。これは、漠然と称され統一された表現がないままであった現状を打

開するものであった。

石丸良輔氏は、赤色土器の出土分布図を作成し「赤色土器が出土した遺跡は主として薩摩半島西岸に沿って分布」する点を指摘した。これは、先に紹介した池畠氏の指摘をより補強する報告であった。石丸氏は、これを基に「伝路（伝馬路）」について想定を行っている（石丸 2004）。

このように、報告書を中心として幾つかの重要な指摘がなされてきた。だが、冒頭で述べたとおり分布域やバリエーションなど、ある程度明確に示さなくてはならない課題がある。次ではこれらの点について述べていくこととする。

本論に入る前に、第X章第11節において行った、この赤色について成分分析を紹介しておきたい。分析にあたっては、当センター繩文調査室の内山伸明氏に協力を依頼し、センター所蔵の蛍光X線分析装置を用い、必要に応じて電子顕微鏡写真を撮影した。分析した資料は第105図174と第106図183で、関連資料として芝原遺跡出土資料2点、上水流遺跡出土資料2点も合わせて分析を実施した。その結果、持株松遺跡資料に関しては、ベンガラなどの顔料は検出されていない。特に、183にに関しては鉄分のピークも胎土部分の結果と大差はないことがわかった。過去に実施された赤色土器の分析では、山下堀頭遺跡においても、赤色部分と胎土部分との分析が行われ、今回の測定結果に類似する結果が報告されている。報告書では、「顔料の塗布の可能性を示す値は得られなかった」と述べられ、「顔料以外の化粧土の塗布も考えられる」ことを指摘している（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005）。この他に、下永追遺跡においても実施されており、この時の分析では「ベンガラなどの鉄を主成分とした赤色顔料」と同定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004）。

これら少ない分析結果ではあるが、赤色土器に用いられた赤色顔料は、水銀朱ではなくベンガラや赤鉄鉱などの周辺で産出される顔料を用いてるものと、赤色ではあるが鉄分のピークが明確でないものの2種類が存在していることが指摘できよう。ただし、持株松遺跡の分析結果では、銅の成分も検出されていることから、この点に関しては類例の増加を待ちつつも留意しておきたい。

さて、表82は現段階で筆者が知り得た限りでの赤色土器出土遺跡一覧である。集成に際しては、報告書に掲載されているものについて、内面のみ赤色を呈するもの、内外面が赤色を呈するもの、外面上のみ認められるものの3タイプを抽出した。本来であれば、器種及び器形の変化も表に組み込み、時間軸の設定を行わなくてはならないが、地域性を浮き彫りにするという観点から、今回は一括して取り扱っていきたい。そして、この表を

表82 赤色土器出土一覧

番号	遺跡名	所在地
1	大井遺跡	出水市奥森原
2	瀬戸A遺跡	出水市中央町東瀬戸
3	瀬戸B遺跡	出水市中央町瀬戸
4	朝日遺跡	出水市城山町朝日
5	五村遺跡	薩摩川口市東五村町河内ノ木
6	坂ノ原遺跡	薩摩川口市東坂ノ原
7	計前世遺跡	薩摩川口市中野町計前世
8	田代遺跡	薩摩川口市中野町田代
9	高見遺跡	薩摩川口市東高見
10	御所里馬鹿頭遺跡	薩摩川口市小郡馬鹿頭
11	西ノ平遺跡	薩摩川口市小郡西ノ平
12	安佐今井遺跡	いわき市水野町上安佐今井
13	上ノ原遺跡	いわき市水野町大原
14	市ノ原遺跡1号点	いわき市水野町大原字上ノ原
15	市ノ原遺跡2号点	いわき市水野町大原字市ノ原
16	安原平遺跡	日向市安原町安原
17	吉野遺跡	日向市吉野町吉野吉野城
18	朝日遺跡	日向市朝日町伊佐伯朝日之泊
19	大ノ原遺跡	日向市吉野町大ノ原
20	西ノ原遺跡	日向市吉野町西ノ原
21	下山田遺跡	日向市吉野町下山田
22	鶴原遺跡	日向市吉野町鶴原
23	市ノ山遺跡	日向市吉野町市ノ山
24	奥口遺跡	日向市吉野町奥口
25	美良子遺跡	日向市吉野町美良子
26	赤手田遺跡	日向市吉野町赤手田
27	猿ノ元遺跡	日向市吉野町猿ノ元
28	尾ノ原遺跡	南九州市金原町
29	因島前原遺跡	南九州市金原町
30	山川原遺跡	南九州市金原町山川原
31	早瀬遺跡	南九州市金原町早瀬
32	平野田遺跡	南九州市金原町平野田
33	小原遺跡	南九州市金原町小原
34	上野原遺跡	南九州市金原町上野原
35	中原遺跡	南九州市金原町中原
36	神社遺跡	南九州市金原町神社
37	上野原田遺跡	南九州市金原町上野原田
38	船原遺跡	南九州市金原町船原
39	高見遺跡	南九州市金原町高見
40	山道遺跡	南九州市金原町山道
41	城山遺跡	南九州市金原町城山
42	新田丹波遺跡	南九州市丹波町新田
43	幡尾遺跡	南九州市丹波町幡尾
44	尾崎台古墳群	南九州市丹波町尾崎
45	二ノ宮遺跡日燃	鹿児島県西方市尾長町二ノ宮
46	舟岡公園遺跡	鹿児島市
47	武藏野遺跡	鹿児島市武藏野一丁目
48	山ノ中遺跡	鹿児島市西郷町山ノ中
49	完里遺跡	鹿児島市完里町宇佐尾完里
50	フジカミ遺跡	鹿児島市吉田町フジカミ
51	大原遺跡	鹿児島市大原町大原
52	種子・大山遺跡	鹿児島市大原町種子・大山
53	御宿遺跡	鹿児島市御宿町御宿
54	大森古墳	鹿児島市大森町花園町大森
55	小瀬遺跡	姶良市小瀬町小瀬
56	小堀遺跡	姶良市小堀町小堀
57	石守遺跡	姶良市石守町石守田石守
58	山道遺跡	湧水町
59	年ノ宮遺跡	姶良市年ノ宮町年ノ宮
60	臼田遺跡	姶良市臼田町臼田石臼
61	大田遺跡	鹿児島県北方久日郡
62	野野原遺跡	鹿児島市野野原町
63	野野原田遺跡	鹿児島市野野原町野野原田
64	田原下遺跡	鹿児島市田原町下田原下
65	村田山遺跡	鹿児島市村田山
66	柳代遺跡	鹿児島市糸田町柳代
67	上ノ原遺跡	鹿児島市糸田町上ノ原
68	猿ノ原遺跡	鹿児島市糸田町猿ノ原
69	中田立遺跡	鹿児島市山田町中田立
70	羽吹遺跡	鹿児島市北山町羽吹
71	高島古墳	鹿児島市北山町中平高島古墳
72	井手ノ上遺跡	曾於市井手町井手
73	福地城跡	曾於市吉井町下原
74	櫛原日燃跡	曾於市櫛原町日燃
75	高見遺跡	曾於市高見町
76	萬子遺跡	曾於市萬子町
77	南浦遺跡	相良郡川辺町南浦
78	立野遺跡	相良郡川辺町立野
79	糸浦遺跡	相良郡川辺町糸浦

第207図 赤色土器出土遺跡位置図

基に第207回のとおり位置図を作成した。両者を用いて、南九州の状況を概観していきたい。

まず、本遺跡の所在する薩摩半島南部では、従来の指摘にあるように、東海岸部より西海岸部に多く、特に日置市を中心にして分布している状況が見られる。注目される点としては、本遺跡横を流れる万之瀬川を境として、その以北と以南では明らかに遺跡数に変化が見られることであろう。すなわち、この点から赤色土器の中心地は万之瀬川以北である、と指摘することが出来る。なお、下永迫A遺跡では、土器の出土量比率を算出しておらず、これによると、赤色土器は全体の23%を占めていることが報告されている。

薩摩半島北部では、日置市に近いところでその出土が見られる。この他、充実高台榦に赤色部分が観察される資料が見られる点もこの地域の特徴である。この地域は、充実高台榦の分布が濃い。そして、その分布は薩摩国府周辺に広がっているようである。

大隅半島南部では、わずかに6遺跡で出土している。この点に関しては、発掘調査事例数も少なからず影響している可能性もある。

大隅半島北部では、1つの遺跡内からの出土量は少ないながらも、点在している状況が見られる。都城市にかけてこの状況は大差ない。

熊毛諸島では、上屋久町叶遺跡で出土している。なお、これ以南での出土例が確認出来なかったことから、現段階での最南端の遺跡と言うことになろう。

このように、傾向としては既に池畠氏や石丸氏が指摘しているように、薩摩半島南西部にその分布が集中するということがわかる。しかし、その広がりは集中域こそ薩摩半島南西部に見られるが、県下全域に点在するように分布している状況であった。この状況について、石丸氏は墨書き土器との関係も吟味した上で、路との関係を指摘している（石丸 2004）。この検討は薩摩半島に限定したことであるが、未報告資料なども含めた詳細な分布の検討を行うことで、より明確に示すことが出来るものと考える。また、今回は言及できなかったが、器形的な特徴から、9世紀後半から10世紀前半にかけての資料が多い点も指摘できよう。これは、黒色土器の南九州への展開と極めて連動しており、両者の関係が色の違いはあるが、着色面にはミガキ手法が用いられていることなど、緊密に関係していることを示唆して思われる。加えて、この段階はその前後の時期と比べて遺跡数も増加する背景についても論究していかなくてはならない。

以上のように、その出土傾向を掴むことが出来た。

また、該期には充実高台榦と呼ばれる特徴的な一群の存在もある。太宰府において、薩摩から来た土器として著明な資料であるが、薩摩の様相は明確ではない。時期

判定には共伴関係や出土状況などを詳細に分析しないといけないが、充実高台榦が出土する遺跡に於いてもこの赤色土器が認められ、両者が時間的に近接している可能性が高い。このことは、古代の土器生産と流通に関わる問題へと発展することと思われ、今後より注意が必要な点であろう。

これまで述べてきたように、古代赤色土器はその分布の中心が薩摩半島南西部にある。また、充実高台榦にも赤色土器が存在していることなどから、9世紀後半から10世紀の前半に中心があると言えるであろう。そして、赤色土器の展開は森隆氏の指摘する黒色土器が広く展開する頃の資料が多い点と類似する。このように、古代の南九州を考える上での素材は現在確実に増加しており、今後はこれらについて明確な時間設定を行い、その成立と展開についても考えて行く必要があろう。

持林松遺跡は、発掘調査時から中世の遺跡として注目を集めている。確かに、中世の造構遺物に関してこれまでの歴史観に一石を投じる資料も有ろう。隣接する渡畠遺跡や芝原遺跡に関しても同様のことが言える可能性もある。しかしながら、中世以外の多くの時代や時期に関しての情報も膨大である。これらについても十分に検討し、複数期にまたがる遺跡の1面のみが詳細な検討を経ずして過大評価を受けることのないよう留意して行かなくてはならない。

最後に、文中でも述べたが分析に当たっては内山氏の協力を得た。再度感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 旭慶男 1987 「第7章歴史時代の遺構と遺物」『上加世田遺跡－2』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 加世田市教育委員会
- 池畠耕一 2003 「第二編 吹上のあけぼの」『吹上郷土誌』通史編一 吹上町
- 石丸良輔 2004 「第5章 まとめ」『下永迫A遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村和美 1994 「鹿児島県(薩摩・大隅国)における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会
- 八木澤一郎 2003 「第4章 石板遺跡の調査」『山ノ脇遺跡ほか』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2004 「下永迫A遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2005 「山下堀頭遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(92)

(黒川 忠広)

第8節 古代・中世の鉄器について

本遺跡出土の鉄器で古代・中世の両時期のものは、層位が場所によっては明確でないこともあり、他の出土遺物とのセット関係や、他の遺跡の出土状況を参考とした時代区分を行った。以下、県内の出土事例をもとにこれらの考察をおこなっていきたい。

古代鉄器について

紛鍊車は古代を中心に出土例が見られるようである。鎌については291は鍛冶屋馬場遺跡（薩摩川内市）で、292は小中原遺跡第3次調査（現南さつま市）においてそれぞれ同じ形状のものが報告されている。これらの事例から9~10世紀のものであると考えたい。

中世鉄器について

短刀のI類（765）は一般的に当時腰刀と呼ばれていたものである。仕明遺跡（志布志市）と上野城跡（薩摩川内市）では白磁IV類（玉縁口縁）の椀と共に土坑墓内と柱穴構造から出土しているので、11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。本遺跡のものも上記の2遺跡と同時期と考えられるが、短刀と土坑墓との関係を結びつけるような出土状況は、確認されなかった。短刀のII類は県内の類例が少ないが、山ノ脇遺跡（日置市）の農具埋納遺構で類似する資料が出土している。共伴した青磁から14世紀とされるので、本遺跡のものも、14世紀以降としておきたい。刀子は県内に中世の類例が無いが、古代の刀子とは形態が違うことから中世とした。また、手斧形を呈する斧（777）は類例の出土が古代・中世共に類例が無いが、「石山寺縁起」に使用されている様子が描かれている（謹澤1984）ことから中世とした。これらについては今後の成果を期待したいところである。

火打金は類例が少ないが、上野城跡で13世紀の方形竪穴からの出土が県内の初現である。本遺跡出土の2点（778, 779）も同様の時期以降のものであろう。ところで火打金とは、火打石と打あわせ火花を発生させるための三角形の鋼鉄片である。火打金に関しては藤木聰氏の論考がある。藤木は九州出土の火打金を下表のように分類している（藤木2004）。

このなかで本遺跡出土の2点はI類にあたる。

火打金の出現時期について、九州では10世紀末~12世紀以降の中世前半においてI類が主体を占め、II類が少量みられる。16世紀頃の中世後半以降になると、III類が出現し、II類は継続する。I類はほとんどみられない。

なお、火打金は明治10年代にマッチが市場に出回るようになると、次第に世の中から姿を消すようになる。そのマッチもライターの出現により、社会全体の需要が激減していることは我々の知るところである。

鎌については平根鎌が上野城跡の12世紀の資料と類似しており、丸根鎌は廻城（霧島市）の14~15世紀の資料と類似している。

本遺跡の中世の鉄器は大きく、12~13世紀に出現する鉄器（短刀I、火打金、平根鎌）と14世紀以降に出現する鉄器（短刀II、丸根鎌）とに分けられるようである。一遺跡としては種類も豊富で、刀子や手斧のように県内では初めて出土した器種もありこれらは遺跡の性格を反映している可能性がある。今後、出土例の増加を待つ必要がある。

引用・参考文献

- 鹿児島県教委 2002 「鍛冶屋馬場遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(39)
鹿児島県教委 1991 「小中原遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(57)
鹿児島県教委 2004 「上野城跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(68)
鹿児島県教委 2003 「山ノ脇遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(58)
有明町教委 2005 「仕明遺跡（1~3次）」「有明町埋蔵文化財発掘調査報告書」(7)
河口貞徳・本田道輝 1984 「廻城－落城と出土遺物－」
廻城発掘調査報告書
謹澤敬三 1984 「絵巻物による 日本常民生活絵引」
神奈川大学日本常民文化研究所編 平凡社
藤木 聰 2004 「九州における火打石・火打金－集成資料と基礎的な整理－」「古文化談叢 第51集」 九州古文化研究会

(抜水茂樹)

表83 火打金の分類

平面形		紐掛け/装飾など	下辺の長さ
I類	三角形（山形）	両端は上方へ返される	三角形部分に円孔あるものあり 10cm以内
II類	三角形（山形）	両端は上方に折り曲げられる	— 10cm以内で大小あり
III類	三角形（山形）	—	三角形部分に左右対称の透かしあり 10cm以上

第9節 中世の遺物について

本遺跡の特徴として、中世の遺構、包含層から出土した多種多様の輸入陶磁器が挙げられ、その器種組成は旧金峰町（現南さつま市）教育委員会が平成8～11年度に調査した小蘭遺跡の遺物組成と大体において一致する。また、規模は違うが九州北部の博多や大宰府といった中世の交易拠点のそれにも近い。本遺跡出土の輸入陶磁器を使用目的によって分類すると以下の通りである。

1. 食膳具

碗（白磁IV類・V類・VI類・VII類・IX類）
龍泉窯系青磁I類II類III類
同安窯系青磁I類III類
天目

坏（龍泉窯系青磁III類上田分類C類
白磁森田分類D群）

皿（白磁II類III類V類VI類VII類IX類
龍泉窯系青磁I類
同安窯系青磁I類）

盤（輸入陶器I類III類）

2. 貯蔵具

壺（輸入陶器II類IV類）

耳壺（輸入陶器III類IV類VI類VII類XII類）

甕（輸入陶器I類II類III類V類）

3. 調度具

水注（輸入陶器IV類V類）

瓶（磁州窯系瓶）

合子

4. 調理具

鉢（輸入陶器I類III類IV類VI類）

これは県内の他の輸入陶磁器出土の遺跡と比較してもその種類の多さが指摘できよう。また国内の鐵入土器・陶器としては、瀬戸内系の土師質土器、植葉型及び和泉型瓦器、東播磨系の須恵器捏鉢と甕、東海系遺物として常滑産の甕、瀬戸産の卸甕と小壺蓋、桙万丈産の甕と捏鉢、備前産の摺鉢、肥前産の滑石製石鍋などで、多産地のもので構成される。

本遺跡出土の中世の輸入陶磁器を大宰府の貿易陶磁編年に従って時期区分し、併せてその時に相当すると思われる国産の陶器等をまとめてみたのが第208図である。ただし遺物の全形や型式・時期が特定されていないものは割愛したことと了承されたい。これによると、本遺跡の中世遺物は11世紀後半から15世紀前半のもので構成されているといえる。それぞれの時期の出土遺物について、輸入陶磁器と国産の陶器等を中心に様相をみていき本遺跡の性格を検討していきたい。

C期（11世紀後半～12世紀前半）

輸入陶磁器が出土する最も古い時期である。白磁は玉緑口縁を特徴とする碗V類と口緑端部を水平あるいは水平に近い角度に外反させる碗V類があり、甕はII類とVI類がある。青磁はこの時期には見られない。輸入陶器と

して磁州窯系の白釉瓶と水注IV類、盤が見られる。

D期（12世紀中頃～後半）

青磁と白磁の出土量と種類が一番多く、本遺跡への輸入陶磁器のピークのひとつをなす時期である。龍泉窯系青磁はいわゆる割花文の碗I類と小碗I類があり、皿I類もこの時期である。またD期に出土する同安窯系青磁は碗I類・皿I類・皿III類がみられる。白磁は碗V-4類・VII類・VIII類・皿III類・皿V類などがあり、土坑墓から出土した優品の碗と青白磁もこの時期のものである。破片が小さく、厳密に区別できたわけではないが、青磁の皿に関しては同安窯系青磁が龍泉窯系青磁より圧倒的に多い。輸入陶器としては鉢I-1b類・III類・VI類等の調理具がみられる。国産の陶器等もこの時期から見始める。また、肥前産の滑石製石鍋がD期～E期にかけて流入してくれる。

E期（13世紀前後～前半）

青磁の種類が限定される。鎌倉弁文である龍泉窯系青磁碗II類のみで、白磁の出土がみられない。E期の特徴は、貯蔵具である壺IV類・耳壺VI類・耳壺VII類及び甕I類（内折口縁）、甕III類（Y字口縁）、甕V類（T字口縁）等がみられることがある。この時期の国産陶器は口縁部の断面がL字状を呈する常滑甕5型式である。D期に比べて青磁の種類こそ少ないものの、輸入陶器の種類の多さでE期は、D期に続くピークの時期であるといえよう。また、広域流通品である東播磨系須恵器がD期の後半からこのE期に流入してきている。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭）

D・E期に比べて青磁・白磁の出土量が極端に減少する。青磁は龍泉窯系青磁碗III類と坏III類、白磁はVII類（口禿げ）の碗・皿が殆どである。輸入陶器はE期に続きたく貯蔵具である壺・耳壺・甕類等がみられるが減少傾向にあるといえる。この時期は国産陶器の種類が増え、口縁部の断面がN字状を呈する常滑甕6型式と鉢や、瀬戸の卸甕等が見られ、D期より約1世紀の間、東海系陶器の発展と交流があったことが窺える。東播磨系須恵器もこの時期までみられ、加えて桙万丈系の須恵器や瓦質土器などの流入もみられる。

G期（14世紀初頭～14世紀後半）及びそれ以降

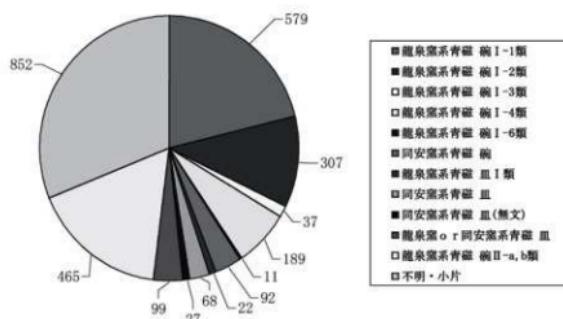
F期以上に輸入陶磁器、国産陶器の出土量は減少するので、G期とそれ以降の時期をまとめて扱った。輸入陶磁器として青磁・白磁・青花が、国産陶器として広域流通品である備前の摺鉢・瓦質土器（奈良火鉢）などがみられるが、いずれも少量である。

以上のことに中世前半期の九州における中国との陶磁器貿易形態を併せて論じていきたい。本遺跡の輸入陶磁器の流通がピークを迎えるD・E期、すなわち12世紀中

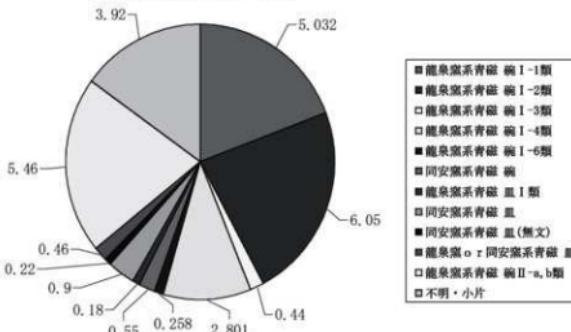
表84 包含層中の青磁類別集計表

青磁 分類	片数	重量 (kg)	備考
龍泉窯系青磁 碗 I - 1類	579	5.032	D期
龍泉窯系青磁 碗 I - 2類	307	6.05	D期
龍泉窯系青磁 碗 I - 3類	37	0.44	D期
龍泉窯系青磁 碗 I - 4類	189	2.801	D期
龍泉窯系青磁 碗 I - 6類	11	0.258	D期
同安窯系青磁 碗	92	0.55	D期
龍泉窯系青磁 盒 I類	22	0.18	D期
同安窯系青磁 盒	68	0.9	D期
同安窯系青磁 盒(無文)	27	0.22	D期
龍泉窯 or 同安窯系青磁 盒	99	0.46	D期
龍泉窯系青磁 碗 II - a, b類	465	5.46	E期
龍泉窯系青磁 碗皿類	12	0.22	F期
龍泉窯系青磁 环皿類	16	0.1	F期
龍泉窯系青磁 碗IV類	3	0.09	G期以降
龍泉窯系青磁 盒	3	0.2	G期以降
龍泉窯系青磁 小碗	2	0.04	G期以降
龍泉窯系青磁 盒	6	0.06	G期以降
龍泉窯系青磁碗上田分類C(書文)	2	0.018	G期以降
碗(見込み蛇の目釉剥ぎ)	4	0.07	G期以降
壺	2	0.03	G期以降
不明・小片	852	3.92	
総 数	2798	27.099	

D E期の青磁の破片数の割合



D E期の青磁の重量の割合



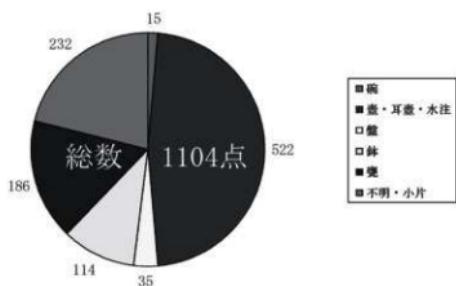
頃から13世紀前半期は、大宰府古代権力が極度に衰退し、鴻臚館（大宰府）による管理貿易の形態が崩れだす時期である。同時期はまた、中央及び在地権門寺社が玄界灘及び九州西岸に莊園を有し、そこに宋商船等を引き入れ、直接取引する形態に代わる時期である。さらに東海系陶器や東播磨系須恵器が広域流通するのもこの時期である。また本遺跡からは畿内系の瓦器もD・E期に見られる。なかでもD期にみられる植葉型の瓦器は京都や撰閑家とのつながりが推定される遺跡に分布することが指摘されている。山本信夫氏は、「本遺跡の貿易陶磁の種類と量からして、一般階層よりはこれらの物資を優位に獲得できる富裕な階層の存在が考えられる。またこれらの階層は輸入物資の流通実権を掌握していたことも考えられる。」としている。ところで白磁・青磁等の碗・皿・合子等はそれ自体が商品であるが、E期に出土が集中する壺・耳壺・壺等の貯蔵具は、それ自体が商品でなく、商品輸送時のコンテナーとしての役割を果たしていくことが考えられる。のことからD・E期の交易について2つのことが想定できる。1つめは壺・耳壺・壺等の貯蔵具を使って陶磁器以外の物資の運搬も行っていた可能性があるということ。2つめは壺の中に碗・皿等の食膳具をいれて船舶のバラストとして船底に積んで航行していく可能性があるということである。

九州における中国陶磁器の輸入量はその後、13世紀から14世紀前半には最盛期を迎える。一部庶民階層まで需要は及んでいる。本遺跡のF・G期前半がこれにあたるが、この時期の本遺跡の様相は輸入陶磁器がしだいに減少し、国产陶器や須恵器や在地土器が主体となる。ところで本遺跡は水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでいるので、必ずしも層序が安定している状況ではなかった。そのため在地土器の主体をなす土器は、多数が古代の土器と同一層で出土したため別が困難であり、時代別の数量的把握は断

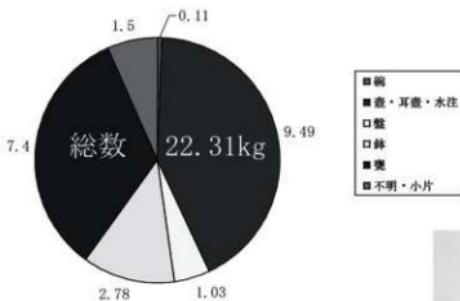
表85 包含層中の輸入陶器 器種別集計表

器種	片数	重量(kg)	備考
碗	15	0.11	
壺・耳壺・水注	522	9.49	D～E期
盤	35	1.03	C期 E～F期
鉢	114	2.78	D～F期
塵	186	7.4	E期
不明・小片	232	1.5	
総 数	1104	22.31	

輸入陶器の片数の割合



輸入陶器の重量の割合



念した。G期の後半の出土遺物からは交易の様子が殆ど窺えず、さらに16世紀以降には畠地あるいは水田となっていたと考えられる。

引用・参考文献

- 亀井明徳 1986 「日本貿易陶磁史の研究」 同朋舎出版
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器検」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 金峰町教委 1998 「持鉢松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
- 森本朝子 2003 「博多遺跡群出土の合子について」『博

四耳壺の製作技法について

本遺跡出土の輸入陶器の組成から特徴的と言えることのひとつに、貯蔵具の多様性があげられる。完形品として出土した四耳壺(449)の製作技法について陶芸家四元 誠氏に詳しく見て顶いた。

(1) 形成について

外底面に残る工具痕よりロクロは右回りであり、高台は削り高台である。輪積みで形成された胴部外面の下約3分の1は削って仕上げられている。胴部を削る際は壺を逆さまにして、ロクロ上に管状の工具(和名を湯台という)を据えそれにのせて回転しながら削っている。管状の工具を使用したことは、内底面の窪み形状よりわかる。また、耳は胴部を削る前に付けてある。

(2) 程度について

玉垂れ状になっている程度は意図として意識的に流しかけられている。程度のある方を火前を持ってきている。灰釉の種類は不明である。

(3) 焼成について

全体的に焼成不良である。焼成に際してはおそらくこれよりも大きい壺か、もしくはサヤ鉢に入れられて焼かれているようである。

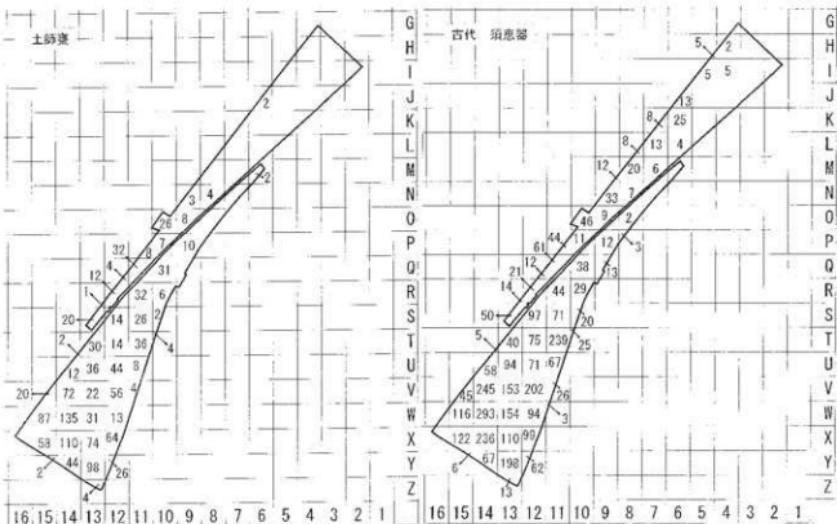
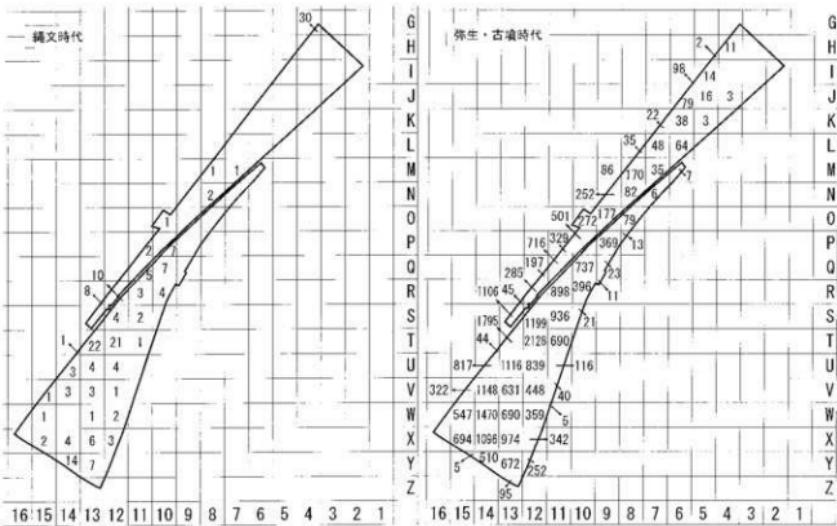
(4) 用途について

貯蔵具としての四耳壺であるが、一時的に固体あるいは液体の商品を保管する容器として用いられたのではないだろうか。その理由は焼成不良により、液体を長期間保存しておくと染み出ると考えられるからである。

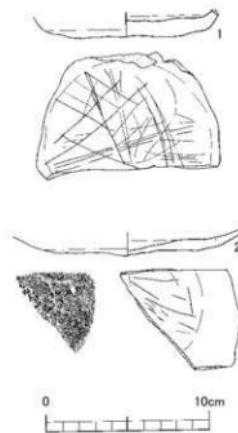
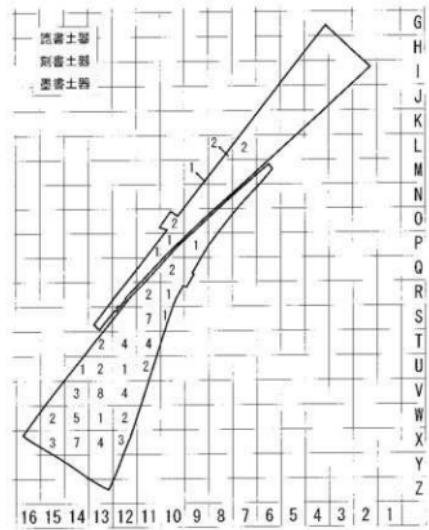


四元氏製作の四耳壺（左）と449

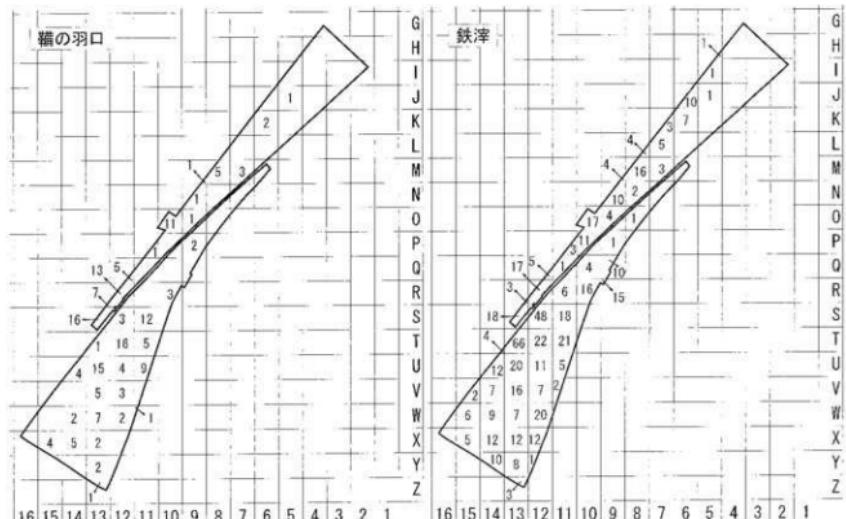
(抜木茂樹)



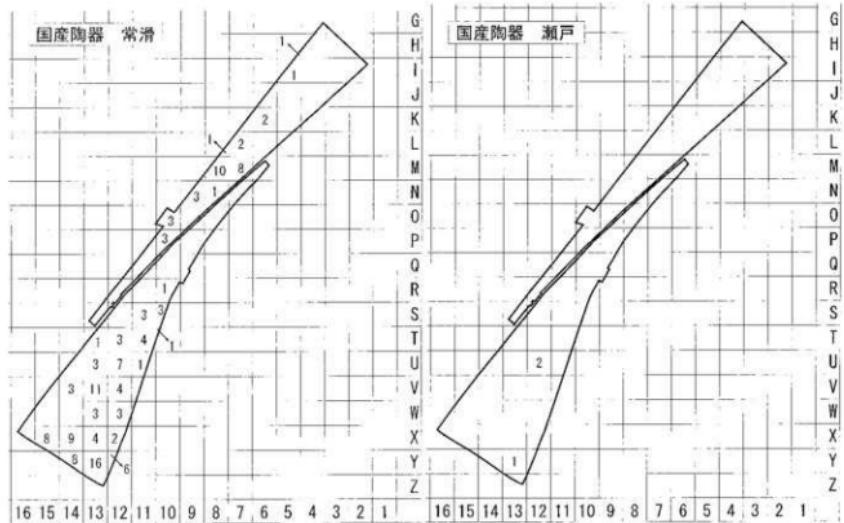
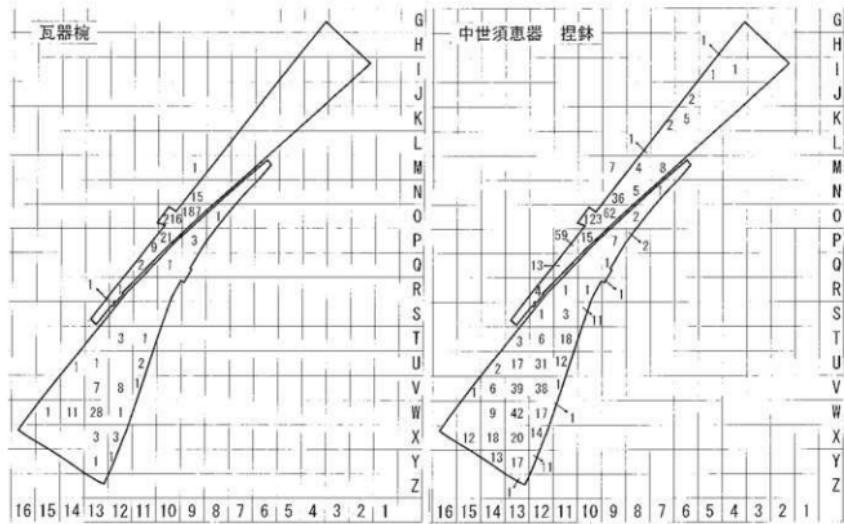
第209図 グリッド別遺物数（1）



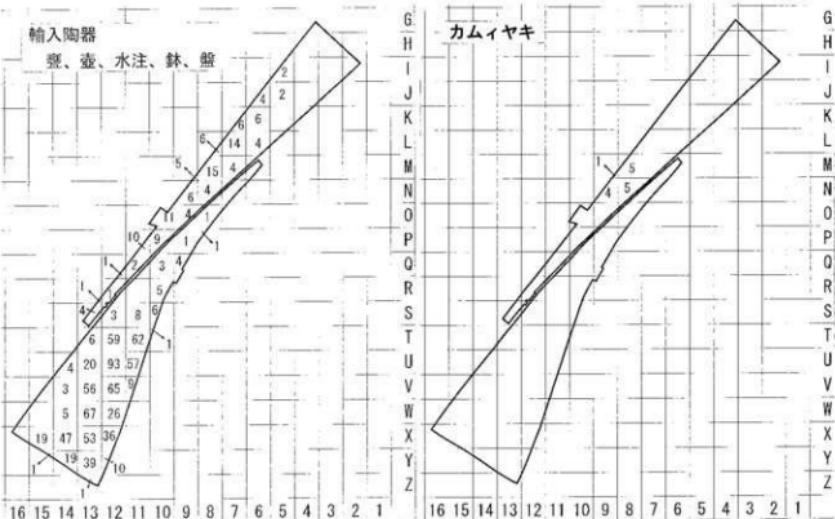
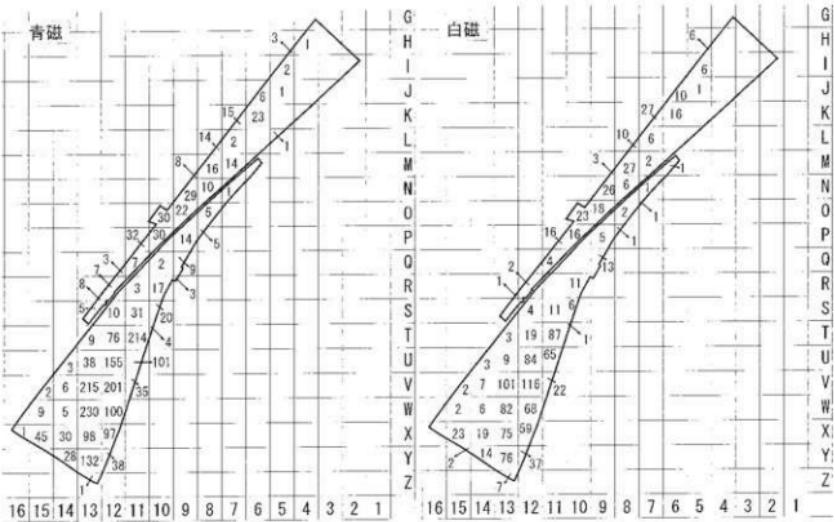
第211図 刻書土器



第210図 グリッド別遺物数 (2)



第212図 グリッド別遺物数（3）



第213図 グリッド別遺物数 (4)

写 真 図 版



土層断面（S-10区）



土層断面（Y-12区）古代の溝状遺構 5号
土層断面



弥生～古墳時代遺構の集中部（T～X-11～14区）



竪穴住居跡 1号（T・U-11・12区）
弥生～古墳時代 遺構

2号土坑（S-12区）



埋土の状況



完掘状況



溝状遺構 1号内壺出土状況（R-10区）



壺出土状況（X-14区）



土器溜まり（S・T-11～13区）

弥生～古墳時代 遺構・遺物出土状況



2号土坑（X-13区）



溝状遺構 5号（W～Z-13～15区）



歛間状遺構②（N-7区）



遺構検出状況（R～W-11～15区）

古代 遺構（1）



掘立柱建物跡 1号（C・D-7区）検出状況



掘立柱建物跡 1号（C・D-7区）完掘状況
古代 遺構（2）



中世遺構全景



ピット群②



畝間状遺構②



大雨で冠水した調査区



掘立柱建物跡 2号 (P・Q-9・10区)
中世 遺構 (1)



土師器集積遺構 1号・2号 (T-13区)



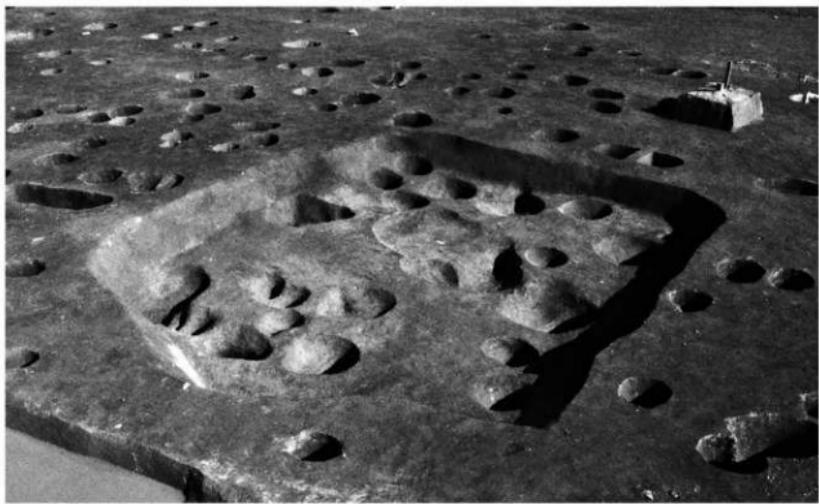
土師器集積遺構 3号 (T-13区)



石列 (X~Y-13~14区)

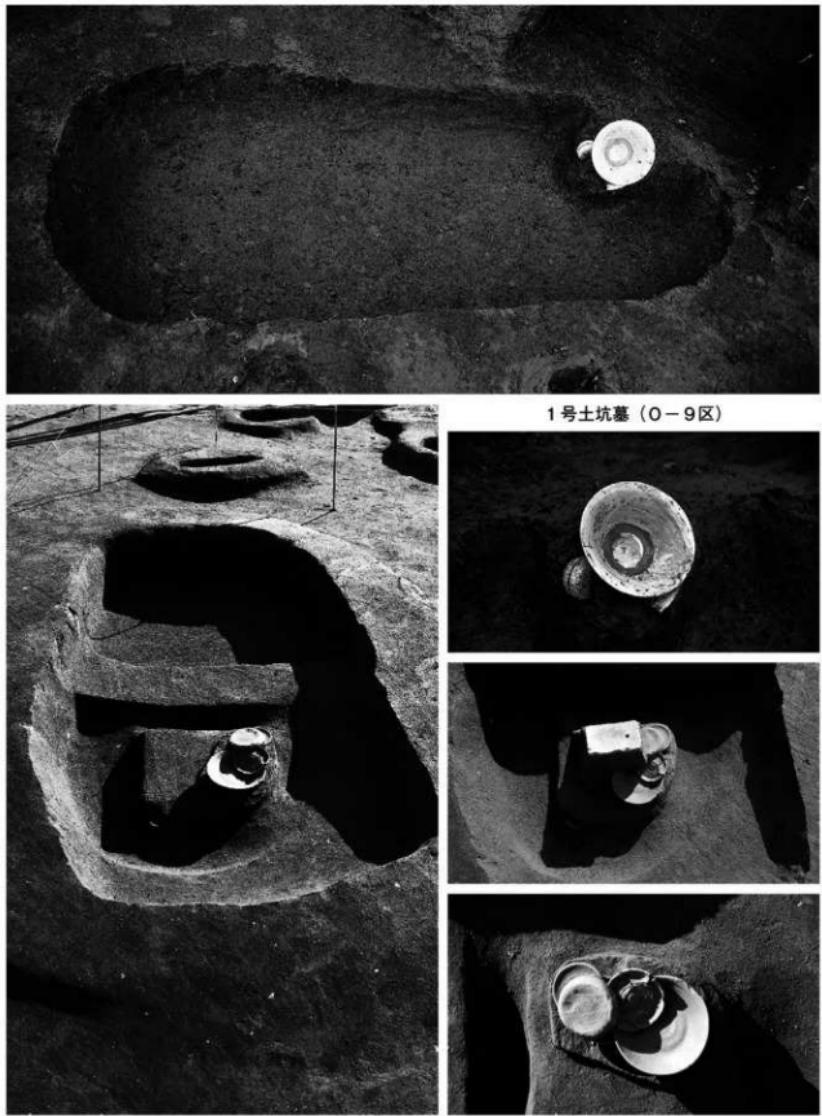


掘立柱建物跡 1号 (O-10区)



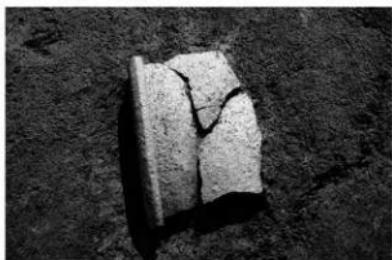
竪穴建物跡 (W-13区)

中世 遺構 (2)

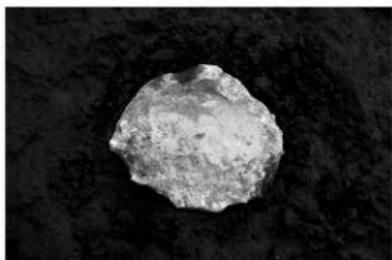


1号土坑墓（O-9区）

2号土坑墓（U-11区）
中世 遺構（3）



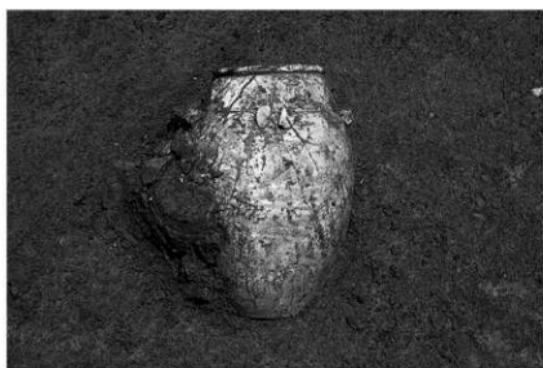
輸入陶器（盤）出土狀況



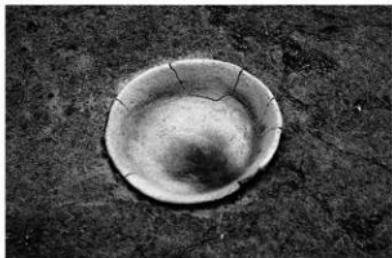
滑石製石鍋出土狀況



青磁碗出土狀況



四耳壺出土狀況
中世 出土遺物（1）



土師器出土狀況



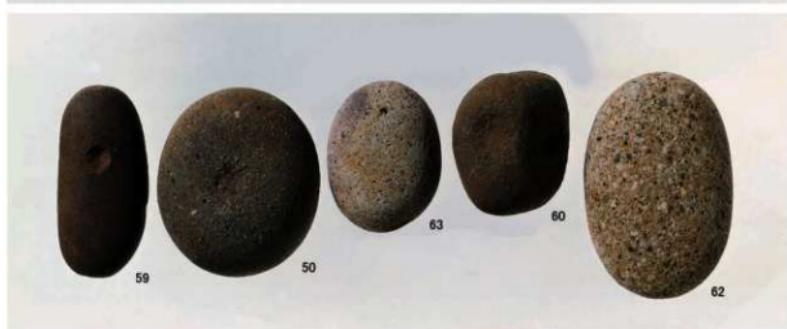
短刀出土狀況



硯，土師器出土狀況



須惠器出土狀況
中世 出土遺物（2）



縄文時代 出土遺物



弥生・古墳時代 遺構内遺物（1）



弥生・古墳時代 遺構内遺物（2）



弥生・古墳時代 遺構内遺物（3）



弥生・古墳時代 遺構内遺物（4）



弥生・古墳時代 出土遺物（1）



274



261



454

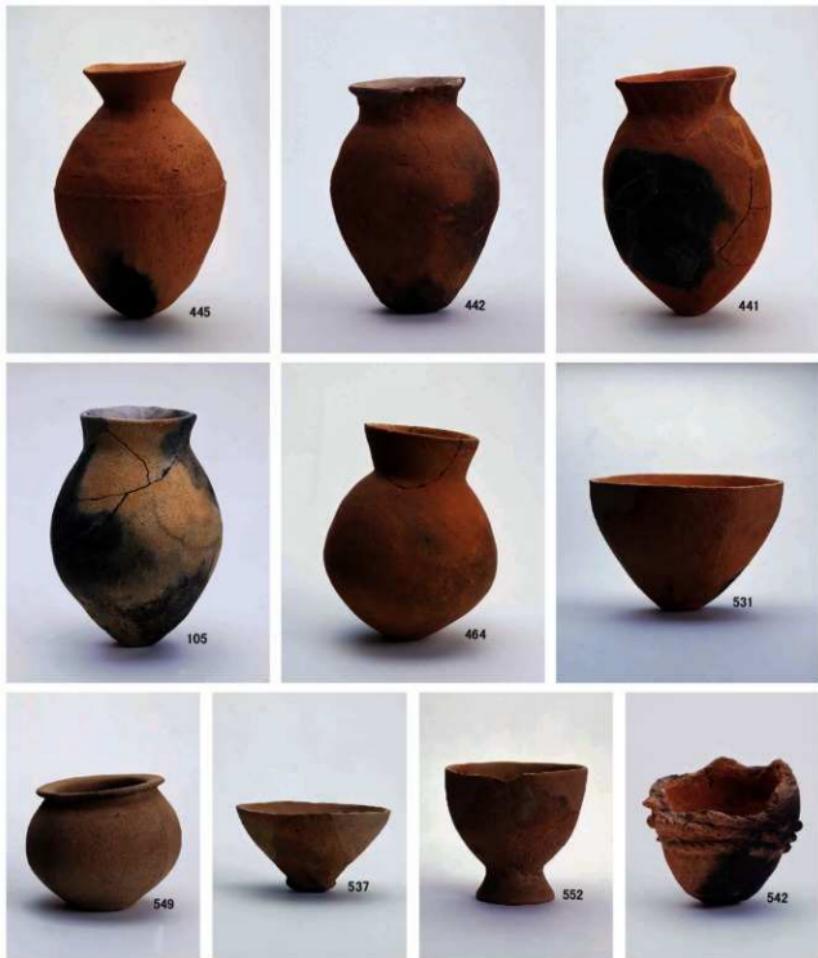


444

弥生・古墳時代 出土遺物（2）



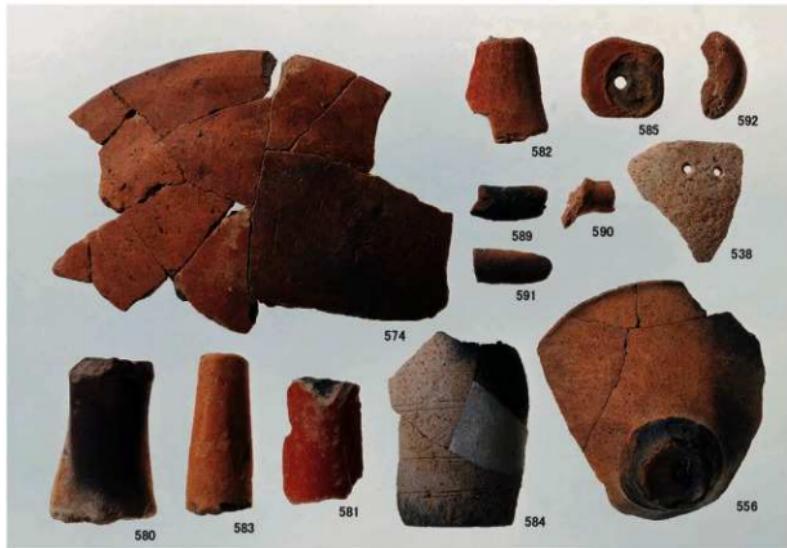
弥生・古墳時代 出土遺物（3）



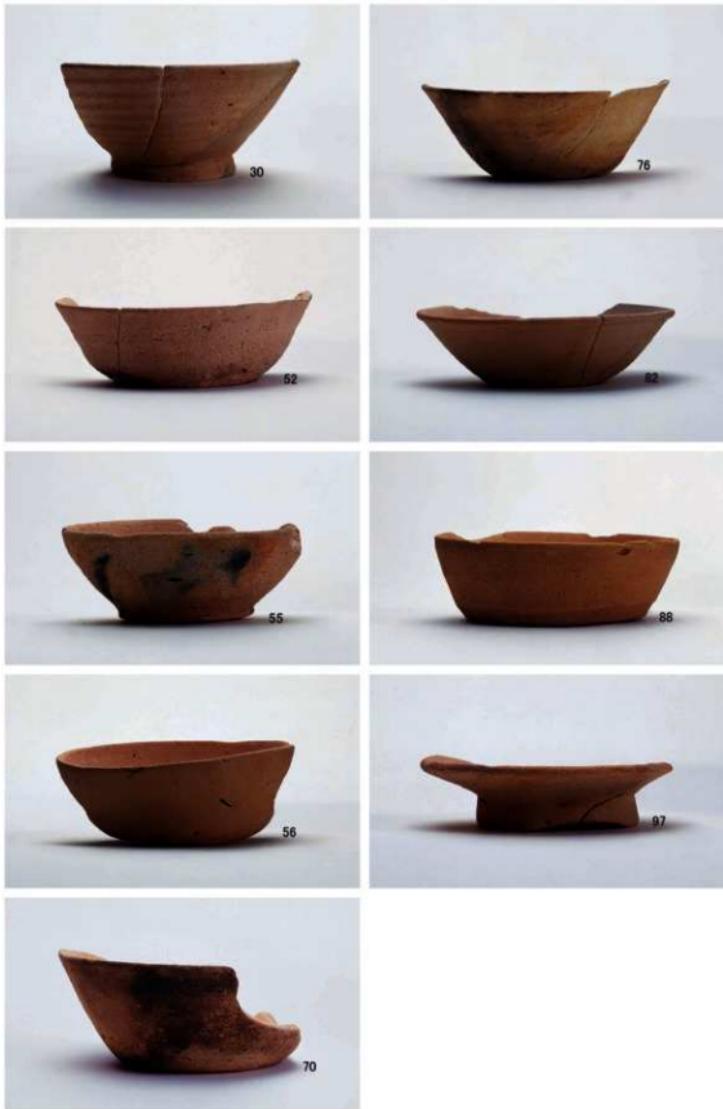
弥生・古墳時代 出土遺物（4）



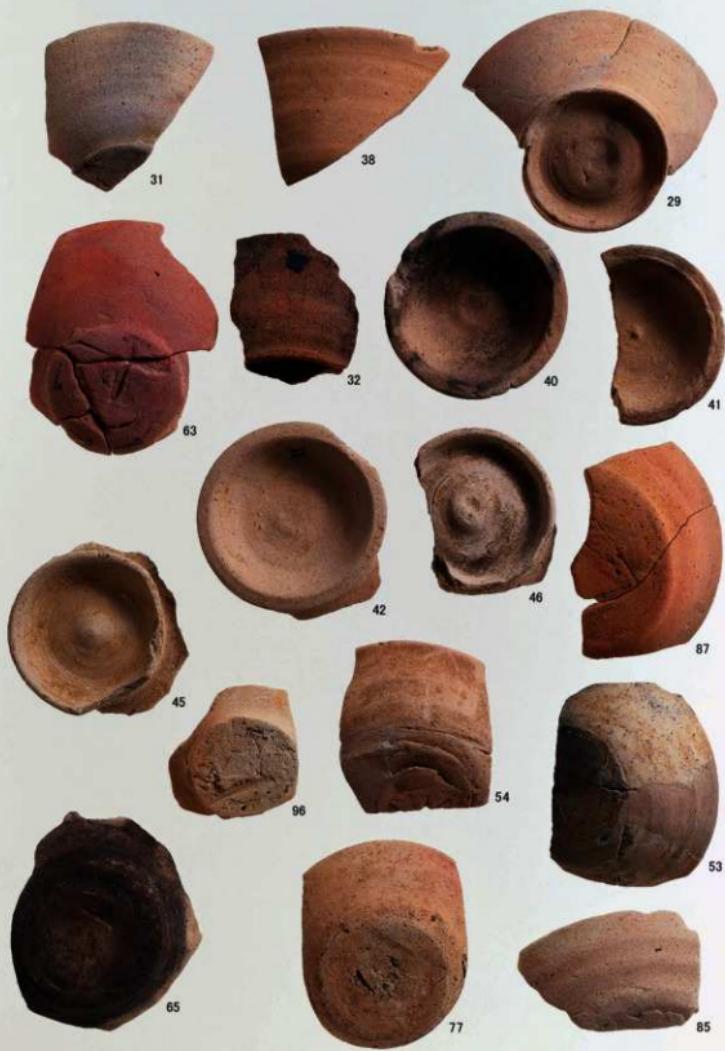
弥生・古墳時代 出土遺物（5）



弥生・古墳時代 出土遺物（6）



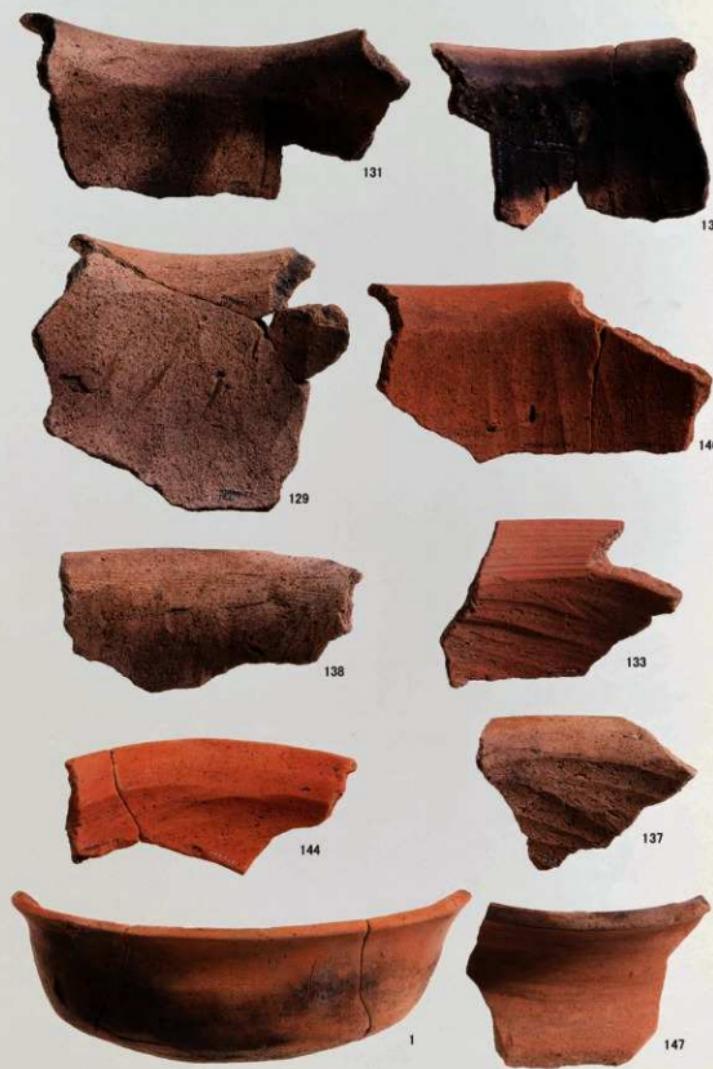
古代 出土遺物（1）土師器



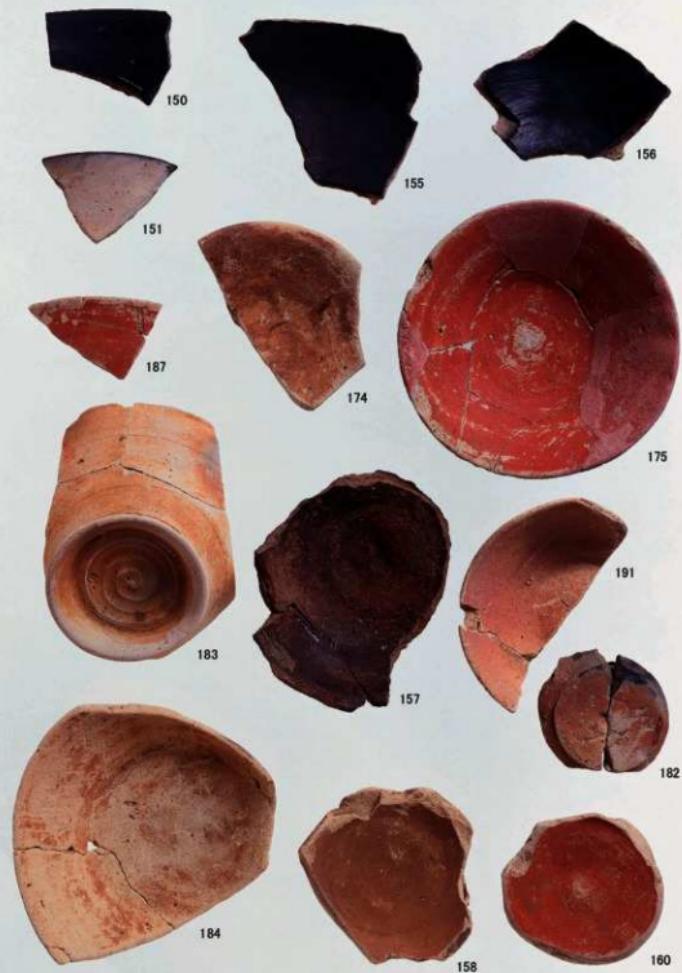
古代 出土遺物（2）土師器



古代 出土遺物（3）土師器



古代 出土遺物（4）土師器



古代 出土遺物（5）黑色・赤色土器



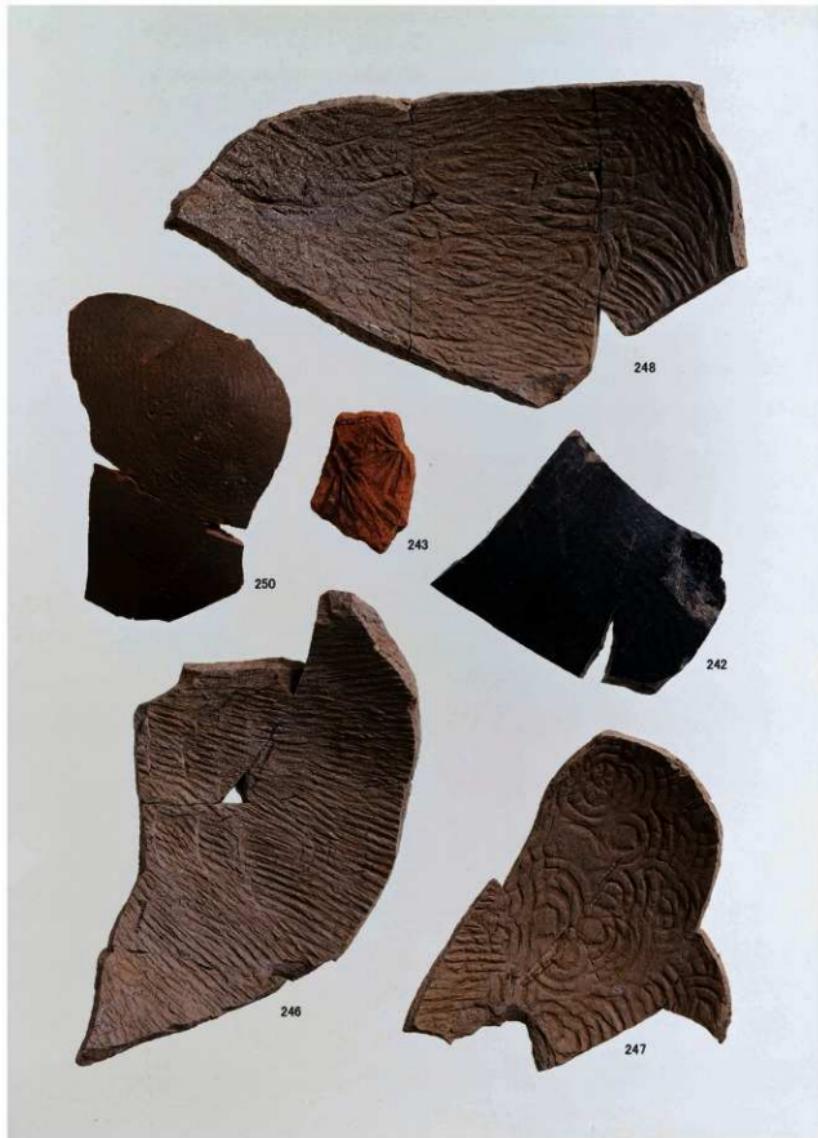
古代 出土遺物（6）須惠器



古代 出土遺物（7）須惠器



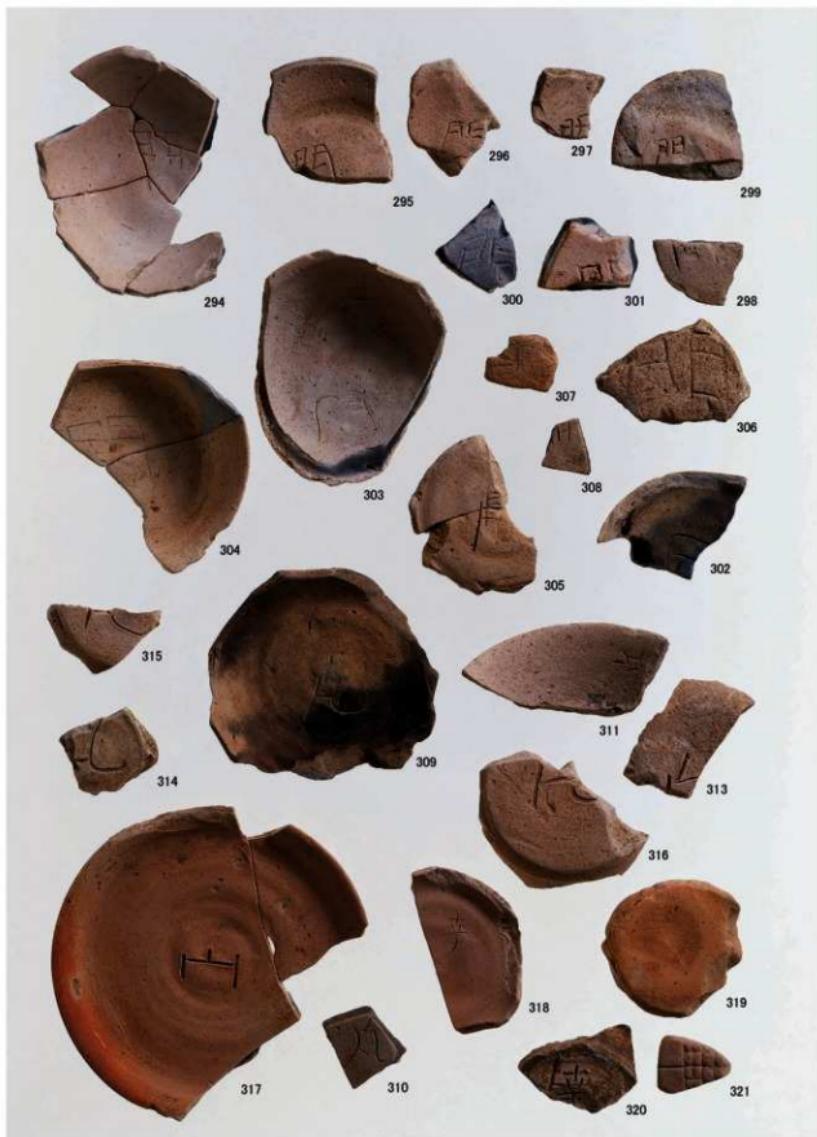
古代 出土遺物（8）須惠器



古代 出土遺物（9）須惠器



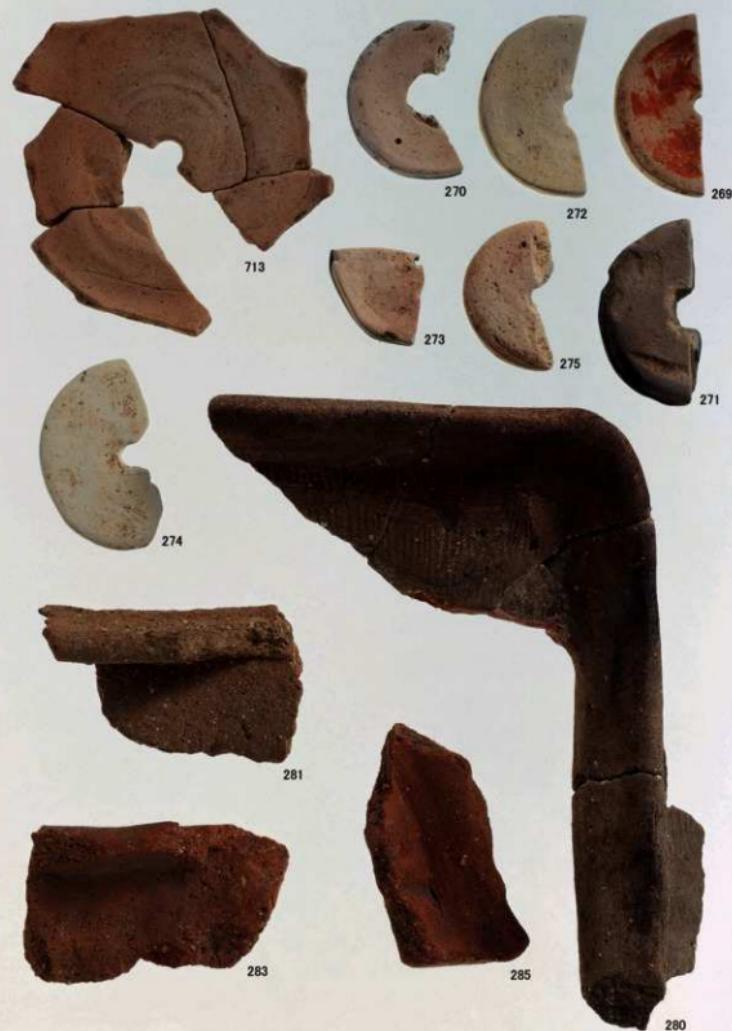
古代 出土遺物 (10) 須惠器



古代 出土遺物 (11) 篆書土器等



古代 出土遺物 (12) 篆書土器等



古代・中世 出土遺物 (13) 土製品